

第2章 建築学科シンポジウム

建築学科
高橋康夫

2.1 シンポジウムメンバー紹介

司会兼モデレータ

- 高田光雄（建築学科）
- 竹脇 出（建築学科）
- 金多 隆（建築学科）

パネリスト

【配役】

- 学生 A 数学が得意でエンジニアリングに関心を持つ学生。将来、研究者になるか実務家になるか悩んでいる。規律正しい生活を送る。
- 学生 B 芸術の才能に恵まれ、建築家を夢見る学生。成績はよいが私生活はやや乱れている。
- 学生 C 専門分野を取り巻く社会問題に広く関心を持つ学生。議論好きでまちづくり系 NPO 活動にも参加。平均的な学生生活を送る。
- 学生 D 他学科の学生の立場。
- 教官 E 建築論研究の世界的権威。自らの建築論と表裏一体となった設計作品も発表。講義は格調が高いが難解で、学生には近寄りがたい存在。
- 教官 F 京大出身でも建築出身でもない環境系の学者。学問の統合としての環境学を作ろうという野心の持ち主。学生には親しみやすく、生活全般にわたる相談にもよくのる。
- 教官 G 従来 of 社会システムに異を唱える個性的な若手建築構造学者。留学生活が長くアメリカの生活様式になじむ。学生からは変わった先生と思われる。
- 教官 H 他学科の教官の立場。

コメンテータ

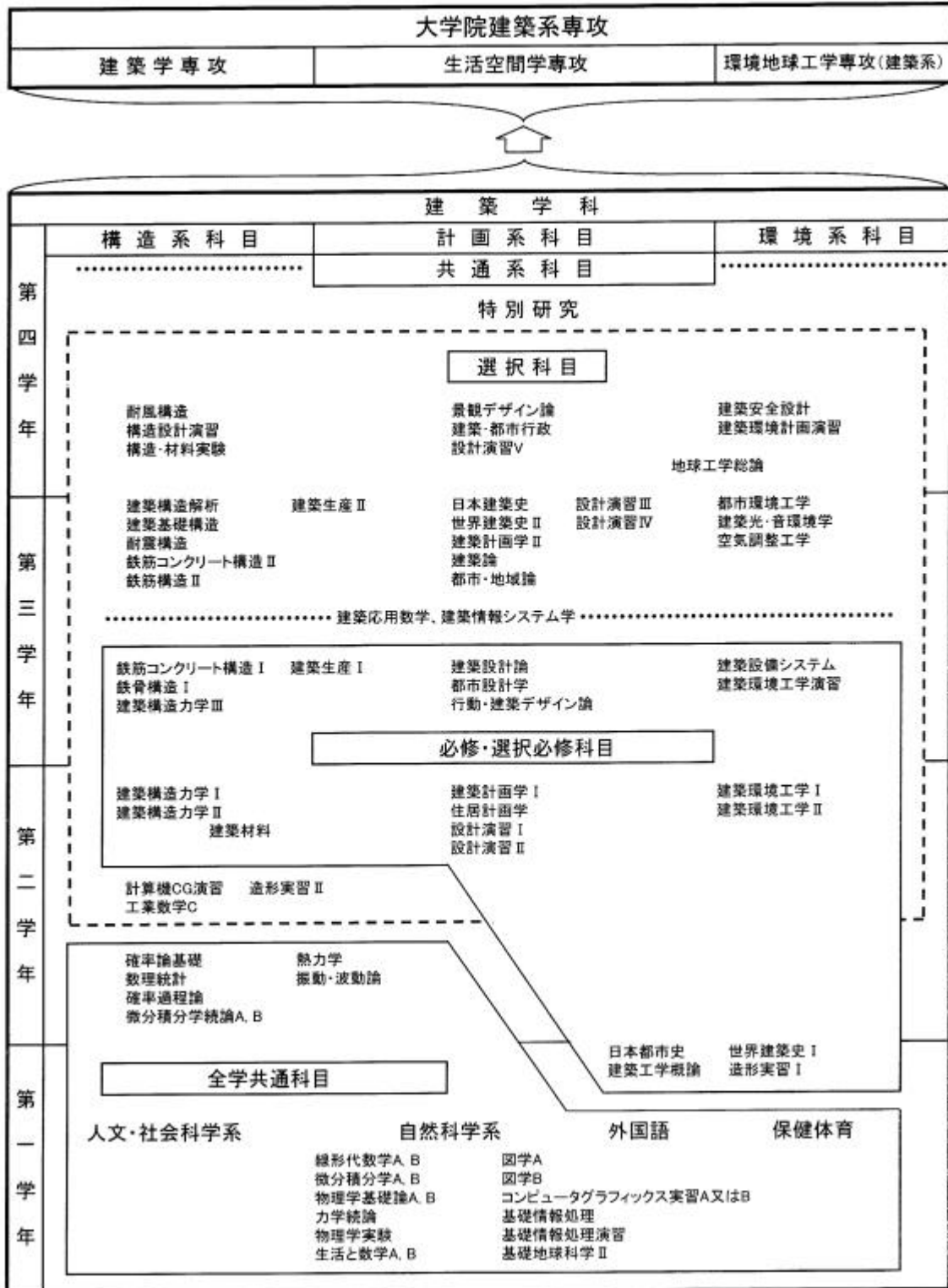
- 鈴木真理子（滋賀大学教育学部）
- 大山泰宏（高等教育教授システム開発センター）

記録

- 石田泰一郎（建築学科）

表 2.1 授業科目連関表

建築学科の教育と大学院建築系専攻



2.2 建築学科の概要とアンケート内容の説明

2.2.1 カリキュラムについて

建築学科教育の全体像 人間中心の視点に立つ建築学

教育課程： 計画系、構造系、環境系、共通系から構成される。(表 2.1)

カリキュラム(平成5年制定)： 全学共通科目・専門科目(必修、選択必修、選択)

授業評価アンケートの概要

平成12年度： 鉄筋コンクリート構造学Ⅱ 平成13年度： 前期全科目

授業アンケートの目的： 教官の勤務評定には用いない。

全科目について実施して状況を把握する。準備中の改組に向けて教育の改善を図る。

アンケート結果の概要： 学生の実態が判明

授業技術への批判 施設、設備に対する要望 カリキュラムへの批判

設計演習に関する補足説明

設計演習のカリキュラム構成： 造形演習 設計演習Ⅰ～Ⅴ スタジオコース

小学校の課題(設計演習Ⅲ-2)についてスライドを用いて説明

演習の過程(課題説明、草案批評、最終プレゼンテーション)

学生の図面の紹介

2.2.2 授業評価アンケート

京都大学工学部による工学教育の改善に向けた取り組みの一貫として、平成13年1月と平成13年7月に建築学科1、2、3回生を対象に授業評価アンケートを実施した。その目的は、建築学科で現在行われている教育の効果を調べ、学生の希望を知り、建築学科のカリキュラム構成、講義および演習のあり方を将来に向けて改善していくための資料を得ることである。

授業評価アンケートを実施した科目の一覧を表2.2に示す。アンケートは、各科目の最終講義あるいはその直前の講義時間の一部を利用して実施し、担当教官の影響を極力排除するため、担当教官不在のもとで関係分野の助手が配付し、回収にあたった。また、正確な意見を聴取することを目指して、学生には匿名で回答してもらった。結果は、個人を特定できない形式で整理され、統計処理したものが公表される予定であることを学生全員に周知した。また今回の調査は教官の勤務評定への利用を想定したものではない。授業評価各科目ごとの講義担当者と回答者数は表2.2のとおりである。

この授業評価アンケートは、建築学科教育基本構想委員会の教官が中心となって実施と集計作業にあたり、全科目についてのデータは別途まとめている。アンケート結果のうち、3回生対象の全体アンケート、設計演習Ⅰ、鉄筋コンクリート構造Ⅰの集計結果を示す。アンケート結果から明らかとなった主な事項は次頁以降の通りである。

表 2.2 授業評価科目一覧およびアンケート回答者数

学年	工学部科目（専門科目）	単位	担当者	回答者数
1 回生	日本都市史	2	高橋（康）	62 (建築 47)
2 回生	住居計画学	2 選必	外山	35
	設計演習	2 必	高橋（康）、布野、山岸、西澤、木下（非常勤）	38
	建築環境工学	2 選必	銚井、田中	29
	建築構造力学	2 選必	上谷、大崎	19
	建築設計学	2 選必	竹山	52
3 回生	都市設計学	2 選必	外山	67
	建築設備システム	2 選必	吉田	29
	鉄筋コンクリート構造	2 選必	渡邊、藤井、西山 (H12 年後期に実施)	57
	鉄骨構造	2 選必	井上	18
	建築生産	2 選必	長岡、古阪、金多	17
	建築構造力学	2 選必	上谷、竹脇	24
	行動・建築デザイン論	2 選必	岡崎	60
	建築計画学	2	宗本	14
	建築論	2	前田	44
	都市・地域論	2	布野	26
	都市環境工学	2	吉田、原田	33
	建築光・音環境学	2	高橋（大）、伊勢、石田	21
	設計演習（A 系列）	3	山下（非常勤）	21
	設計演習（B 系列）	3	前田	13
	設計演習（C 系列）	3	岡崎	17
	建築応用数学	2	銚井、加藤、高橋（大）、大崎	15
	建築情報システム学	2	加藤、大崎	31
			小計	742
2 回生	カリキュラム・授業全般		銚井(アンケート担当)	29
3 回生	カリキュラム・授業全般		(平成 12 年後期に実施)	57
3 回生	カリキュラム・授業全般		岡崎(アンケート担当)	60
			小計	146
			合計	888

(1) カリキュラム構成

- ・3 回生前期でのカリキュラムの過密度を指摘する学生がかなり存在する。今後の検討課題と考えられる。
- ・設計演習に費やす「膨大な」時間と他の講義の出席、予習、復習に費やす時間のバランスが難しい。
- ・全学共通科目（教養科目）と専門科目の関係について十分理解できていない学生が存在する。
- ・計画系に進路を希望している学生とエンジニアリング系（構造系、環境系、共通系）に進路を希望している学生の科目履修形式について再検討が必要とみられる。例えば緩やかなコース制等。
- ・講義および演習のあり方
- ・ファカルティ・ディベロップメント（FD）の名の通り、教官の講義方法の改善を行うための資料として有用なアンケート結果（意見）が数多く得られた。例えば、講義配付資料の量や質、配付資料と口述の講義内容との関係、学生の関心を高める話題提供の方法、板書・発声の方法、演習の取り入れ方等。
- ・講義形式と演習形式の授業の組み合わせに関する有用な意見が得られた。特に講義だけでなく、演習形式の授業も並行して行うことの有効性について指摘する意見が少なからず存在した。
- ・設計演習のあり方、および他の授業との関係についての種々の意見が寄せられた。課題のレベル、講評の客観性・わかりやすさ、作品完成に対する学生の準備時間の見積もり等検討すべき課題が存在すると考えられる。

(2) 学生の講義への出席率

講義への出席率はあまり高いとはいえない。ただし学生は講義内容から判断して能動的に講義を欠席しているわけではなく、寝坊や集中力欠如を欠席理由とする例が多い。これは、教官の講義方法の改善や時間割編成の工夫（1 限開講科目への不満が多い）、学生に対する学科全体としてのガイダンスを一層充実したものにする必要があることを示している。

2.3 パネル討論

2.3.1 テーマ1：何のための設計教育か？

- 司 会： まず、学生のみなさん。設計演習の必要性や、その思いなどを語って下さい。
- 学生 B： 面白いからやっている。将来、建築家になろうと思っているので他の科目には興味がない。設計で面白いのは、どこまでやってもきりがなく、考えれば考えるほど次から次へと新しく良い案が浮かんでくる場所。休みもなしに毎日やっても飽きない。麻薬みたいなもの。夜も昼もない生活を送っているの、ほとんど他の授業にはでない。
- 学生 A： デザイナーになるつもりで大学に入ったが、途中で限界を感じたので方向転換した。デザインはいくらやってもきりがなく、曖昧さを感じる。だからもう少しきっちりしている理数系を選んだ。デザインは教官によっても評価が違ふ。知識の統合のプロセスとして設計演習の必要性は認めるが、その評価基準を示して欲しい。
- 学生 C： 評価の基準に関しては、もう少し町へ出て現実のものを見て、よし悪しを教えて欲しい。さらに新聞を見てると、現実の社会にはマンションや違法建築などいろいろな問題があるがそれらはどう考えるのか。今の設計演習は建築単体のみを扱っているがそれで良いのか。社会的な妥当性や倫理観も設計演習で教えてもらいたいのだが。
- 司 会： 教官側のお考えを。
- 教官 E： 学生 B さんの麻薬みたいなものという意見は、本当にそうだと思う。なぜ麻薬のようになるかという、やはり設計というのは人間のことを考えざるを得ないから。人間のことを考えざるを得ないということは、学生 B さん自身のことを考えざるを得ない。それが設計を麻薬のようにしている理由だと思う。ところがこのような考え方は、20世紀初頭頃までは良かったが、環境問題など近代の種々の問題を抱えている今日では、建築家像をもう少し変えなければならない時代にきているのではないかと。それから、設計に対する教官の評価が異なるという意見があったが、これはむしろ当然だと思う。設計は、例えば科学のように全てを抽象化し、そして抽象化すればするほどアプリケーションの範囲が広がるようなものではないと思う。設計は、構造や設備、環境など科学や技術を取り入れつつも、それらを手段として考える立場をとっている。それから社会的な問題については、建築はファッションではないということを改めて確認しなければならない。20世紀の芸術というのは非常にファッション的だったと思う。例えばピカソは、アフリカの彫刻をポンともってきて近代芸術の出発点としたが、しかしアフリカでは、その彫刻は本来全く違う意味を持っていた。我々も同じような問題を抱えて

いる。一つのファッションナブルな建物をポンと作るのはいいのだが、そのせいで地域社会の意味が変わり、例えば環境問題や景観問題などが生じている。そういうことは学生になるべく伝えるようにしており、授業に出て、設計演習をすればわかるようなカリキュラムを組んでいるはずだが。

教官 G： 構造力学という構造系の重要な科目を担当しているが、設計演習提出の間際になると学生が出てこない。建築の学生には建築全般の知識が必要であり、現状は設計演習に時間を割きすぎている。例えば設計演習には、それぞれの学生の到達目標に応じた難易度のコース分けがあっても良い。

教官 F： 環境系には設計演習で打ちのめされてくる学生がいる。しかし、自分と向きあって、打ちのめされて、別の適した道を選択する。それでも良いと思う。

司 会： 他学科の学生ならびに先生のご意見は？

学生 D： 建築系の建物や製図室を訪ねたことがあるが、きたない。先生の部屋も本棚が迷路のようになっていたりする。これが生活空間学を教える場なのだろうか疑問に思う。

教官 E： 製図室についてはお粗末。これは改善すべき。生活空間学を教える場ということに関連して申し上げますが、ご存じのように、今法学部はロースクールを作っています。ロースクール、メディカルスクール、アーキテクチャスクールは要するに職能なのです。そのため、社会的な倫理などをしっかり学ばなければならない。ところが日本の建築教育には、一級建築士というペーパーテストがある。そこには倫理もなければ美的能力の検査もない。京都は日本で唯一の世界に誇る歴史的伝統的都市ですが、他の国のものと比べると問題にならないくらい景観が破壊されている。その理由として、日本の建築教育が悪い、社会制度が悪いということがあげられる。いかにして大学教育が、一級建築士の認定に変わる評価を得るかということ、我々は今議論している。

教官 H： 学生に創成体験を与える設計演習は興味深い。ただそこには天賦の才能が占める割合が高いのではないか。設計演習の目的は優れたセンスをもつ一部の学生を伸ばすことにあるのか、ボトムアップを図ることにあるのか。そのウェイトはどのように考えておられるのか。

司 会： 本質的な問題に関わる質問ですね。

教官 E： 建築家の教育にとって、美的なセンスが大きな比重を占めているとは思わない。むしろ空間的な思考というか、空間を直感する能力の方が大事だと思う。学生に、お前はセンスがないとか、造形能力がないとコメントするのは最悪。そうではなくて、先程申しましたように人間あるいは自分に向かい合う教育ですから、その人がその人なりに頑張る方向に持って行くべき。私はたまたま研究で、山中先生の箱庭療法のようなことをやっておりますけれども、箱庭で

は、治療者と患者が人間的に向かい合うことが大事であると言われている。設計演習でも、教官と学生との間でそういう対面が絶対必要であると考えます。

司 会： 学生側で、将来の進路について何かご意見があれば。

学生 C： 現実の建築設計や町づくりでは、いろいろな問題があり、経済や法律、倫理などいろいろと学ぶ必要がある。建築学科では他学部他学科の科目を 3 科目 8 単位までしか卒業単位として認定していないが、もっと自由に講義を受講できるようにして欲しい。そうしないと、進路は考えにくい。

2.3.2 テーマ 2：カリキュラムは今のままで良いのか？

司 会： カリキュラムの構成について、総合的な教育と専門の系に応じたコース制が考えられますが、どのように考えるか。

学生 A： 3 回生で分ければよい。各系の科目をバランスよく合理的に勉強できる。

学生 B： 自分を掘り下げるためには、計画、構造、環境という専門分野をさらに越えた幅広い内容を学ばなければならない。(フロイト、ラカン、...) そのためにもっと自由な履修ができる仕組みにして欲しい。

教官 G： コース制には反対。総合的な建築教育を行う日本のシステムを活かすべき。全体の基礎的な知識を余裕を持って勉強できるようにして、専門性の高い科目は選択できるようにする。

学生 C： 結局、総合とコース制といっても、どの学年で分けるかという違いにすぎないのでは。

司 会： プロフェッショナルスクールとコース制について教官 E 先生お話しいただけますか。

教官 E： UIA では建築家の資格として 5 年間の教育と、その半分以上の時間を設計演習にあてることを最低基準として求めている。日本では UIA に対応するために、大学院を含めて 6 年間の教育でそれをカバーすることを検討している。学部だけでコース制などという話はやめて、6 年間ということを考える。なおかつ大学院では他分野の学生も多く入れて、なるべく幅広く建築の問題をやる方がいいと思う。

司 会： ガイダンスはどのように行われているか。

教官 G： ガイダンス担当の教官を決めるなどして、もう少し丁寧にやった方がよい。

教官 F： 私大に比べれば学生に対してむしろ過保護なくらい。ただしガイダンスで方向性を決めるのは難しい。教官とのコミュニケーションの機会が貴重である。

学生 A： 科目選択については 2 年、3 年と進むうちに分かるようになる。むしろ将来の進路決定のためのガイダンスをして欲しい。

学生 C： 授業の中で建築業務の生きた情報が欲しい。構造設計や意匠設計部の実態など。進路選択のための情報が不足している。

教官 G： アンケートの結果の印象として、学生が受け身である。何々して欲しいと言うだけだ。しかも、せっかく特別講義で実務者を招いても学生が出てこない。そういう状況にどう対処すればよいのか。

学生 C： 特別講義は面白いと思う。現実の中の失敗例や成功例を知ることができる。いろいろなところで活躍している人を知ることができ、選択の幅が広がる。

教官 E： 建築学科は職能集団の確立が目標。職能とは、世の中の目的や価値や倫理などを自分で設定して、はじめてそれ（職能）を果たしていると言える。だから教えるとか教えないとかいう前に、自分自身でそういうことを嗅ぎ取っていく能力が必要だということを教える必要がある。

教官 H： 結局、カリキュラムをどうすれば良いのか。コース制を採用すると学生は楽なところばかり取るようになる。建築学科としての結論はどうなのか。

2.3.3 テーマ3：どんな人材を育てるのか？

司 会： まず学生さん。将来、どのような仕事をしたいと思うか。

学生 B： 建築の設計ができる場に身を置いていたい。設計演習のおもしろさは自分の技能が伸びているのが分かること。身につけたその技能を活かす職業に就きたい。

学生 A： 将来は、研究者か技術者。物理的なモデルを適用して、建築設計のあいまいさを減らす、そんな仕事をしたい。

学生 C： 新聞を読んだりして、違法建築やマンション建設など、社会には建築を取り巻く様々な問題があることを知った。例えば町づくりのような、いろいろな人が関わる仕事に興味がある。

司 会： プロフェッショナルスクールではどのような教育をされるのですか。

教官 E： 設計に関して言うと、設計演習をやった学生は社会に出ているいろいろな問題に対処する力があると言われる。設計演習というのは、答えがないところに向かって突き進む。これは先程の、社会の目的や倫理や価値を考えさせるには非常に良い科目だと思う。ただし、日本では、アメリカなどに比べて建築家の数が多いため、職能を確立していないところに大きな問題があるのだが。

教官 F： 京大にしかできないことは、エリートを育てることだと思う。つまり建築というフレームの中で時代を引っ張ることができる人材を育てることが必要だ。設計演習において環境のプロを育てるという視点が欠けていることが問題である。あるいは学生側も受動的になるのではなく、環境のプロとしての職能を身につけたいという希望があるのならば、それを実現するための設計演習のあり方を積極的に提案すべきである。

教官 G： 京大はエリート、特に研究者を育てる必要がある。トップレベルは良しとして、その下の10～20%ぐらいの学生を教育のターゲットにしたらよい。構造技術にし

ても今あるものを全て教えることはできないし、それはまた変わっていくものだ。だから知識を獲得するための能力を養成する。それから国際化という観点から、単に語学能力ではなく、コミュニケーションの能力を身につけて欲しい。

学生 D：先輩とスウェーデンを旅行して、成田空港に着いたとき、その第一ターミナルの税関で直角に曲がらないと入れないところがあり、違和感があった。あるいは箱崎のジャンクションも必ずといって良いほど渋滞する。建築には、そこに魂を与えるような何かが欠けていることも多くあるのではないか。京都の魂、京都のエスプリを育てる、そんな教育がいるのではないか。

教官 H：建築学科の内容が計画系、環境系、構造系とあって、お話を伺うとそれぞれ対象とするものがかなり違うように思える。それがどうして一緒にやっていけるのか。不思議に感じるぐらいだ。

学生 C：実戦部隊として社会に出る学生の立場からいえば、エリートかどうか別として、実力を身につけたい。そのためにも現場の生きた情報を含む教育をしてほしい。

教官 E：プロフェッショナルスクールというのは、一つの職能がサポートしている学校という性格がある。例えば、ロースクールには司法からの要求がある。建築の場合も、アメリカでは建築家協会からの教育に対する要求があり、多くの建築家が学校教育に参加することもある。日本の JIA も現在それを要求している。それから現場の生きた情報ということでは、京都の周辺には先端的な企業の活動があまりないという地理的な制約があり、東京に比べると不利であることは否めない。

学生 C：日本の建築士制度には業務独占権がある。諸外国では非常に限定的な独占権しかない。だから日本では他の職能（構造技術者、環境技術者など）が育たない。

教官 E：日本の構造や環境の教育は、設計演習を含む建築という枠組みの中でできるという点で、アメリカやヨーロッパなどより恵まれている。例えばアメリカでは機械のことだけしかやらない。

学生 A：その反面、日本ではどうしても教育年数が少なく、国際社会では資格として認められづらいということの本で読んだ記憶がある。

教官 E：だから日本では6年一貫教育制度をこれから作るのだということ、国際的に認証させることが必要。

2.3.4 質疑応答

司 会： まず、設計教育についてご質問をお受けします。

大 山： 設計演習 I-V のそれぞれの目的と、学生のなかでの位置づけはどのようになっていますか。

学生 A： 与えられたことをこなしているだけです。

学生 B： 1 回生は歴史的建築物などの図面を見よう見まねでコピーして、図面の書き方を学ぶ。2 回生になると自分で考えてものを作れるようになり面白くなる。ここまでは全員同じ課題で必修。3 回生は規模が大きい建築も取り上げるようになる。構造や環境的な視点が必要だが、もっと実践的な指導が欲しい。このレベルでは系列に振り分けられて、別々の課題を与えられる。4 回生のスタジオコースは学生が先生を希望することができ、5~8 人の少人数で高い密度の指導を受けられる。ただし、大学院の試験準備と時期が重なるので、ジレンマがある。大学院の入試方法を変えてもらえば、もっと打ち込めるはずだ。

司 会： どんな人材を育てるのかというテーマについてのご質問はいかがでしょう。

荒 木： 今日、参加された（役割上の）学生さんはそれぞれタイプは違ってとても優秀な方々だと思います。あまり勉強しない困った学生は建築にもいますか。

教官 E： おりますね。それが不思議と単位が揃っているんですね。

教官 G： 今後はもっときびしく評価する必要があると思う。そして修士の入試で（外部との）学生の入替えが多くなるような方法にしたらよい。

学生 B： できの悪い学生も卒業してからの活躍を期待するという見方でお願いしたい。

司 会： 総合的な学習をすると専門の部分で遅れるという意見がある。この点について意見ありますか。

教官 F： 専門的な能力を身につける場合に、総合的な視点をもたなければ自分の社会における位置づけを見出すことができなくなる。それらは両立するべきであり、総合的な視点がなければ専門能力を十分に伸ばすことができない。

2.3.5 コメンテータ意見発表

鈴木真理子先生（滋賀大学教育学部）

まず他大学からこの FD (faculty development) に参加した立場で全体的な印象を述べる。まず、京大の教官の FD にかける熱意、歴史、自立性を強く感じることができ、感銘を受けた。さすがは京大という印象だ。ロールプレイという形式も、演じている本人の信念に基づいた議論があり、興味深かった。建築教育から始まり工学部の高等教育にまで及ぶ様々な観点からの討議を聞いて勉強になった。

次に、高等教育における理科系教育を専門としている立場からコメントする。設計演習については高等教育ならではの科目だと思った。つまり実践 practices と知識 knowledge をいかに再構築するかという学習の場を、皆さんはデザインしてきたのだと思う。建築学科の多様な専門家集団が、どのようにしてその卵たちを本物の学び(authentic learning) というものに導いて行くのか、そのために熱心に議論してこられたのだと感じた。その中でそれぞれの専門における本物とは何か、エキスパートとは何かとうことでぶつかり合いがあり、またそれが同時に FD のエネルギーにもなっているのだと思う。どのような学生を育てるのかという問いは、すなわち、専門家とは何かという自らへの問いにもなっている。そのような議論を高く評価する。カリキュラムの再構築については、いかにして本物の実践と知識との連関を作り上げることができるかが重要である。実践を通して本物の知識を学生が自ら求めるような場面を組み込むことが可能であれば素晴らしいものになるだろう。

大山泰宏先生（京都大学高等教育教授システム開発センター）

私は臨床心理学と教育を専門としている。職能集団とは技術者、理論家、サイエンティストなど多様な専門家から構成されている。その教育では、実践を中心とした体験的な学びと知識の体系的な学びをどのように循環させ、統合させるのかが、常に重要な課題として存在する。その取り組みのひとつに core program という考え方が戦後導入された。例えば、小学校のクラスで「牛を飼う」という課題を立てる。そのためには牛の流通、経費、あるいは生理などを学ぶ必要があり、「牛を飼う」ことが学習のコアになる。ところが牛の絵を描くだけ、牛に触るだけの生徒がいたりして、なかなか発展的な学習に結びつかないこともあり、未だに議論が続いている。高等教育でもしかりである。新入生で主体的な問題意識を持っている学生は少ない。そこで初年時でいかに学生に問題意識を持たせるのかが課題になっている。例えば、世界的に project based learning という試みがある。ロボットコンテストがその典型例である。それによって学生が様々な知識を体系化し、主体的な問題意識を持てるようにするのである。今回の FD にはこのような問題がまさに集約されていた。しかしこれは簡単に解決できる問題ではなく、いろいろな分野での試みを参照し討議することが求められる。project based learning のポイントとして、ひとつは early exposure というものがある。例えば医学系では1年生を病院の現場にさらすことが試行されている。現場を見ることにより学生は自分の到達点を把握でき、カリキュラムを組み立て、問題意識を持てるようになる。そして、このような創成型科目を考える作業は、その職能集団の分野の専門教育の本質を考えることであり、すなわち職能集団の FD につながるのである。今回の FD の議論はとても参考になった。

記録は討論内容の要点を記したものである。

2.4 授業評価アンケート結果

2.4.1 全体アンケート結果

学 年：【3】

科 目：【全体アンケート】

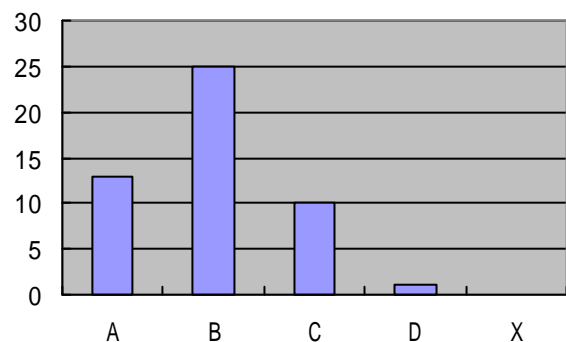
担当教官：【教官 E】

回答者数：【60】

第 部 建築学科のカリキュラム・授業全般について (まず、将来の志望と専門科目について質問します)

質問 1：将来の志望を明確にもっていますか？

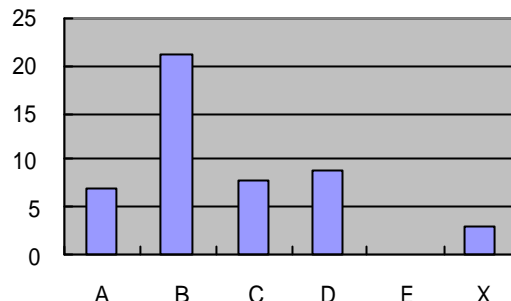
- A 将来どのような仕事につきたいか、具体的で明確な希望とビジョンを持っている。
- B 将来の仕事についてそれなりの希望はあるが、具体的なビジョンは持っていない。
- C 将来の仕事については、もう少し勉強してから決めればよいと思っている。(今は、具体的に考えていない。)
- D 大学を出てからのことについては、ほとんど何も考えたことがない。
- X その他



1.住宅設計をやりたいと考えている。

質問 2 : 専門科目全般の受講登録と勉学状況について

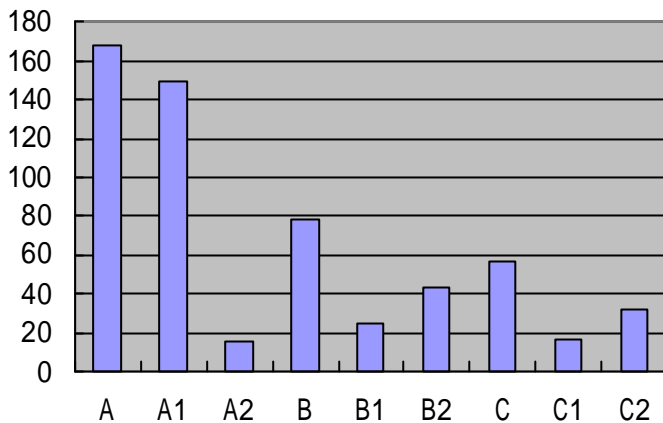
- A ほとんどすべての科目に登録し、全部を熱心に勉強してきた。
- B ほとんどすべての科目に登録したが、将来の志望に必要と思われる科目だけ熱心に勉強してきた。
- C ほとんどすべての科目に登録したが、授業を受けてみて易しそうな(単位がとれそうな)科目だけある程度熱心に勉強してきた。
- D ほとんどすべての科目に登録したが、どれも熱心には勉強していない。
- E 自分の志望にあった少数の科目だけ登録し、それを熱心に勉強してきた。
- X その他



1. ほとんどすべての科目に登録したが、取り組みやすそうな科目だけ熱心に勉強した。
2. (A に対して) 自分でも少しやめた方がいいかと思ったけれどもやっている。
3. ほとんどすべての科目に登録したが、時間に余裕のある時だけ出席し、必要と思われるもののみ勉強した。
4. ほとんど全ての科目に登録したが、おもしろそうなのだけ勉強した気がする。

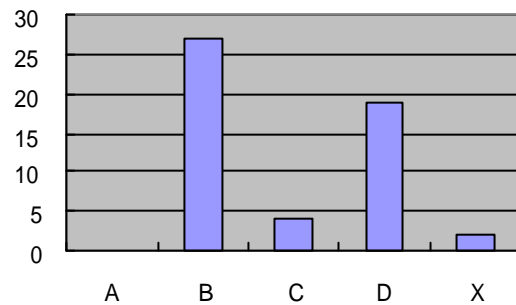
質問 3 : 2 回生後期 (3 回生に対して) または 1 回生後期 (2 回生に対して) の科目の勉学状況と合否について、次の各項目に該当する科目数 (おおよそでよい) を答えて下さい。

- A 自分ではよく勉強したと思う科目 _____ 科目
 - A1 その中で合格した科目 (科目)
 - A2 その中で不合格になった科目 (科目)
- B 勉強しようと思っていたが途中でつまずいて勉強しなくなった科目 _____ 科目
 - B1 その中で合格した科目 (科目)
 - B2 その中で不合格になった科目 (科目)
- C 始めから勉強しなかった科目 _____ 科目
 - C1 その中で合格した科目 (科目)
 - C2 その中で不合格になった科目 (科目)



質問 4 : 科目選択についてのガイダンスについて [複数解答可]

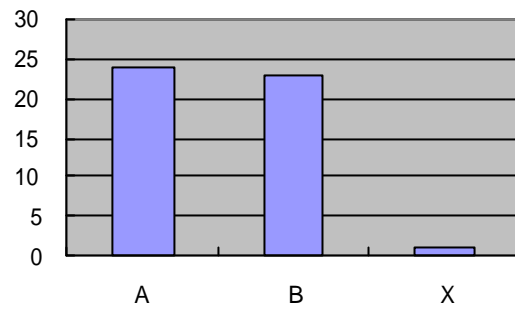
- A 科目選択については、履修指導や教官からの助言が役に立った。
- B 科目選択について、もっと体系的な説明が欲しい。
- C 将来の志望が明確でないので、結局、全科目に登録する。アドバイザーの助言やガイダンスがあっても同じことである。
- D 単位のことを考えれば、結局、全科目に登録する。アドバイザーの助言やガイダンスがあっても同じ事である。
- X その他



1. 全科目に登録して、実際に授業に出てから、中身を理解したので、助言はあったのか？
2. どのような勉強をしたい人はどのような科目をとればいいのかということを説明してもらいたい。
3. 行ってないです。
4. 自分で考えるので必要ない

質問 5：試験の時間割について

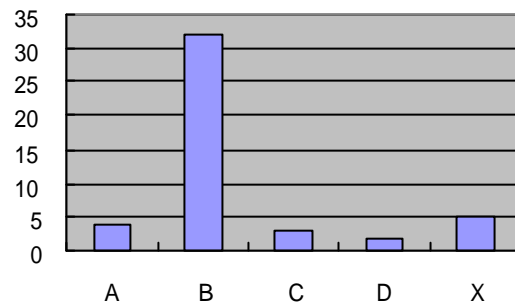
- A 時間割がつまり過ぎていて試験勉強ができない。もっと長期間をとって試験をして欲しい。
- B 今の程度でよい。
- X その他



1. もう少し余裕は欲しいけれども、大体いまの程度でよいと思う。
2. 早めに時間割を出して欲しい。7月に入ったら出してほしい。

質問 6：講義に伴うレポートについて

- A 科目内容を理解するのに役に立つから、なるべく頻繁に出して欲しい。
- B 科目内容を理解するのに役には立つが、あまりたくさん出してもらえないので、ほどほどに。
- C 内容の理解には役に立っていない。単位の取得につながるのなら、出してもらえば有難いが。
- D 自分で勉強するべきで、レポートなど不要である。
- X その他

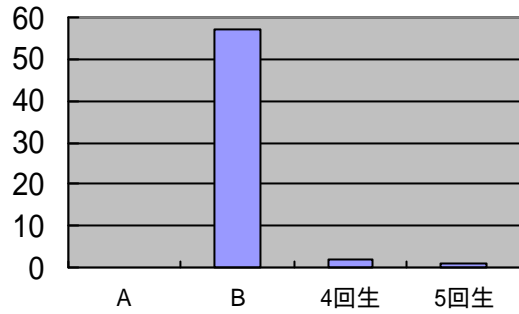


1. 仕方がないのかもしれないけれど、なぜかいつも、多数のレポートの〆切が短い期間内につまってしまうので、取り組み時間がとりづらい。
2. 役に立つ。単位のためにも出してほしい。
3. レポート提出の日程など、他の教科のことなども配慮して決めてほしい。
4. レポートがあるから勉強する、という部分もあるから、少しはあった方がよいと思う。
5. 単位を取るためだけのレポートなら授業はいらない。
6. 難しいのを少なく、というより、手軽なのをたくさんという方が個人的にはやりやすいです。
7. 設計の方を考慮して出してほしい。
8. 設計演習の時期を考慮に入れて欲しい。

質問 7：設計演習について、イ)～チ)に教えてください。

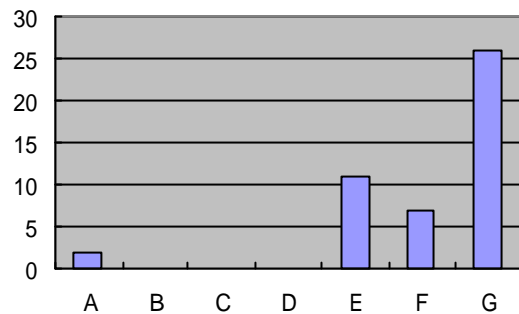
イ) あなたは 2 回生ですか。3 回生ですか。

- A 2 回生
- B 3 回生



ロ) 設計演習はどの段階まで履修しましたか。

- A まだ一つも履修していない。
- B 設計演習 I の途中まで。
- C 設計演習 I まで。
- D 設計演習 II の途中まで。
- E 設計演習 II まで。
- F 設計演習 III の途中まで。
- G 設計演習 III まで。



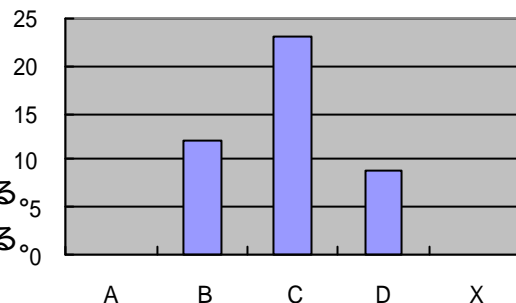
ハ) 設計演習の履修を途中で断念した人 (或いは断念しようと思っている人) は、その理由を記してください。また、今後も継続しようと思っている人は、その理由と感想を記してください。

1. 継続する。まだやって楽しいので。
2. 課題が大変で授業に出れなくなるから。
3. 面白そうなので、続けようと思っている。でも大変。これのせいで留年に近づいてる気もする。
4. 授業との両立がきびしい。
5. 時間がかかりすぎ。設計だけをやっているわけではない。
6. 将来自分がやりたい事につながるため。
7. 手が動きません。自信もありません。
8. 単純にやりがいがある。将来の仕事にしたい。
9. 設計演習をすると時間がなくなり、他の教科に集中できないから。
10. 設計演習に時間を取られすぎて、他の科目に目をむける事ができないから。
11. 継続。設計を通じて物事の考え方や組立方が鍛えられると思う。それと、まだまだ力をつけたいから。
12. 継続しようと思っている。自分の将来の仕事に必要な能力を身につけるため。
13. 設計は自分に向いていないと思ったから。同じ時間をかけるなら、他にやれることがあるので。
14. 継続。好きだから。だが、何が良いものか、わからなくなってくる。
15. いちいち人の作品にいちゃもんつけるのが気に入らない、というお子さま的な考えからです。

16. それ一本にしぼるだけの熱意をもてなかった。他人との気持ちの面でのギャップを感じたから。
17. 大変だった。精神的な負担が大きすぎた。計画系に進むかどうかわからないから。
18. 自分が勉強したい、取り組みたいと思う課題が少ない。講義への出席との兼ね合いがとれない。
19. 明確な目的が見えない。
20. 3 回生前期は授業が多すぎる。設計演習をしたとしても、1、2 を振り返って、何の力もついていない。時間の無駄だった気がする。
21. かかる時間に見合うだけの自分自身の成長がみられなかったこと。考えれば考えるほど、自分の作品がダメなものに感じてきて。
22. おもしろいので続ける。
23. 今後も継続していこうと思っている。設計することが面白いから。
24. 学士編入で入学したために、課題が重複して途中断念した。今後も期間に関係なく自主的に課題をやるつもりでいる。×切はほとんど無視している。

二) 設計演習の指導体制について

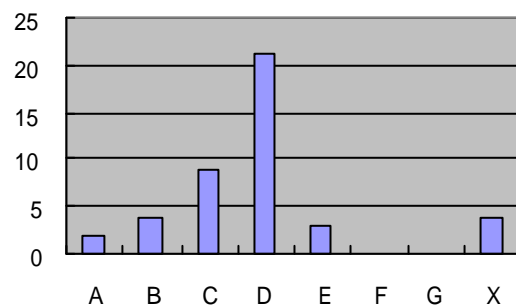
- A 学生一人あたりの教官数が多すぎる
- B 学生一人あたりの教官数はちょうどいい。
- C 学生一人あたりの教官数がやや不足している。
- D 学生一人あたりの教官数が全く不十分である。
- X その他



1. もう少し、スタジオコースまではいかなくていいが、教官を増やす方がよいと思う。

ホ) 設計演習のスケジュールについて

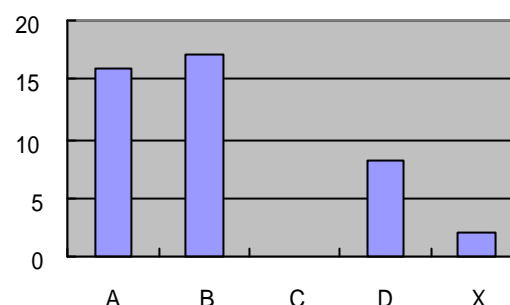
- A 半期 2 課題は過密すぎるので、1 課題にして密度も下げる。
- B 半期 2 課題は過密すぎるので、1 課題にして密度を上げる。
- C 半期 2 課題のままでもっと密度を上げてほしい。
- D 半期 2 課題で今の密度がちょうどよい。
- E 半期 2 課題のままでもっと密度を下げてほしい。
- F 半期 2 課題では不足であり、同密度でより多くの課題をこなしたい。
- G 半期 2 課題では不足であり、密度も上げてより多くの課題をこなしたい。
- X その他



1. 設計演習自体はともかく、講義をもっと早いうち（1、2回生）で増やして3回生の負担は減らしてほしい。
2. あまりよくわからない。どの程度のスケジュールが能力をきたえるのに適切かは教官で判断してもらう他ない。
3. 授業数の多さからすると、期間が短い。
4. 個人によってスタイルが違うので、それに対応して柔軟なスケジュールを組めないだろうか？

へ) 設計演習のグループ数について

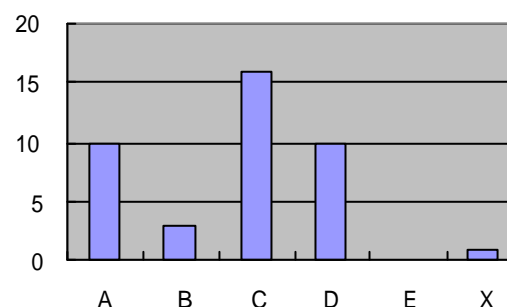
- A 現行の3グループより多い方がよい。
- B 現行の3グループでちょうどよい。
- C 現行の3グループより少ない方がよい。
- D 何グループでもいいがグループ分けの定員を決めない方がいい。
- X その他



1. 不公平がでる。
2. もう少し小さいグループにして教官を増やす。
3. とにかく、教官を増やして欲しい。
4. 学籍番号だけで、適当に教官を割り振られるのは嫌。
5. 設計毎に教官を選ばせて。グループ（2-3人）で一つの設計をしたい。

ト) 設計演習のグループ分けの手法について

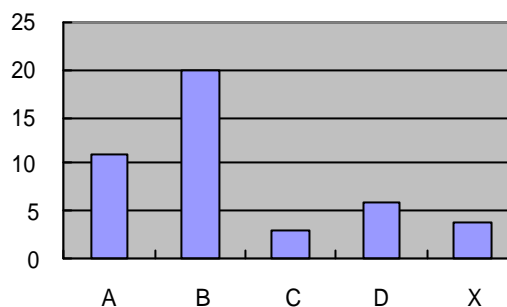
- A 自主的に所属グループを決め一人の教官につく方がいい。
- B 所属グループは決められていて一人の教官につく方がいい。
- C 自主的に所属グループを決めるが指導は流動的な方がいい。
- D 所属グループは決められているが指導が流動的な方がいい。
- E 所属グループに分ける必要がない。
- X その他



1. これもよくわからない。判断材料がこちらにはない。

チ) 設計演習の講評会について

- A 選ばれる作品数が多すぎる。
- B 選ばれる作品数はちょうどよい。
- C 選ばれる作品数が少なすぎる。
- D すべての作品を講評すべきである。
- X その他



1. 各グループ5つ程度で簡潔に。
2. 時間があとのもの(最初の1時間以外)は批評が雑。
3. 講評会の後か前で提出した最終図面に対して、全員にコメントが欲しい。
4. 教授らのやる気の続く程度にしてください。

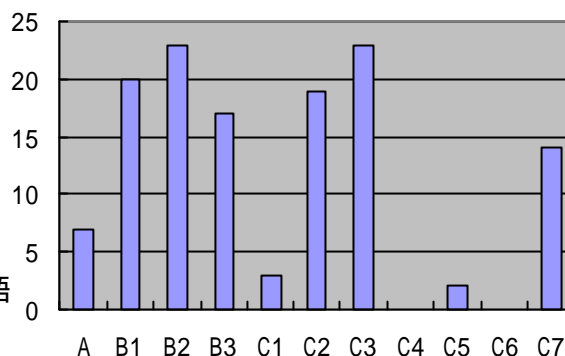
質問 8 : 専門科目のカリキュラム、授業、アドバイザー(ガイダンス)制度などについて、意見があれば書いて下さい。

1. 前述の通り、3回生の講義を1,2回生にもっとわりふるべき。建築全般に対するガイダンス的な講義が欲しい。出席をとる意味がよくわからない。
2. 教官側にも、自分の研究室に来る学生には何をやっておいて欲しいのかということがあるだろうから、そういう点からも将来のビジョンに沿って何をすべきかという指導をもっと行うべきではないだろうか。やみくもに全部取ると、しんどくて体をこわしそうだ。
3. もっと早い段階でゼミ、研究室の説明をしてほしい。
4. ぜいたくな注文であろうが、毎日の授業でやる気を奮起させるような内容の授業、もしくはやり方にしてほしい。ただ内容を消化すればよいというものでもない気がする。
5. 早いうちに建築基準法関係の授業を受けたい。
6. もう少し早い時期から、教官と学生の距離を縮めるような工夫があればいいなと思います。どの研究室がどういった研究を行っているかもわかりませんし、教官に質問もしづらいです。教官との距離が縮まれば、授業も一方的なものにならず、活性化するような気がします。
7. 見学会などをもっと増やして。
8. 学士編入の学生は苦労します。

(つぎに、全学共通科目を含む、カリキュラム全般について質問します)

質問 9: 科目の内容がわからなくなって、「つまずいてしまった」経験がありますか(特に印象の強い科目については空欄に事情を書いて下さい)

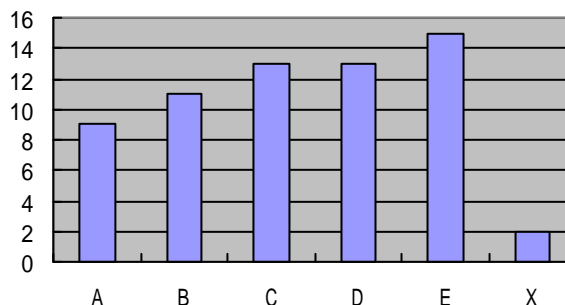
- A まったくない。
- B つぎの時期にある [複数解答可]
 - B1 1 回生
 - B2 2 回生
 - B3 3 回生
- C つぎの科目である [複数解答可]
 - C1 A 群科目 C5 英語
 - C2 数学 C6 英語以外の外国語
 - C3 物理 C7 専門科目
 - C4 化学



1. 構造力学。暴走しすぎ。
 2. 実は、私は 5 回生だが、4 年前の B 群科目の先生はひどいものだった。声は小さく、板書の文字は汚く、1 回生にいきなり 1 ヶ月で教科書を 1 冊終わらせるなど、先生として失格だった。当時の私は、大学とはこういうものかとひどく失望し、後々に非常に大きな影響が出た。このアンケートでそのような先生を一人でもなくしてほしい。

質問 10: (質問 9 で「ある」と答えた人): つまずいた主な理由は何ですか。それを解決する方法としてどうしたらよいでしょうか。[複数解答可]

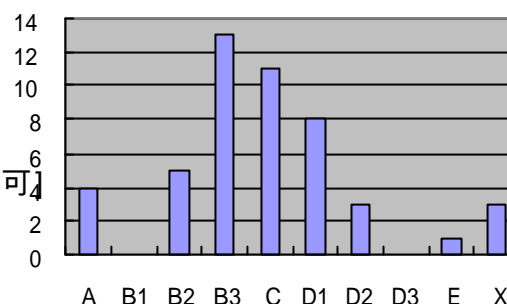
- A 全般的に勉学が忙しすぎた(とるべき科目が多すぎた)。カリキュラムを整理して欲しい。
- B クラブ・サークル活動などで忙しすぎた。課外活動に十分な時間を使えるようにして欲しい。
- C その科目でたまたま欠席したりしたことなどがきっかけとなってついていけなくなった。自分から教官に質問に行くか、チューターがついていて説明してくれていたら解決できたと思う。
- D その科目の講義の仕方が悪かった。もう少しわかり易い面白い講義ならつまずかなかった。
- E その科目の内容に興味を持てなかった。
- X その他



1. 数学に弱い。
2. 内容もむずかしく、時間割もきつく、部活をやっていてはまるで復習する時間もない。
3. 構造力学。量多すぎ。半期一冊はありえない。
4. やる気ばかりが先行し、時間がついていかなかった。

質問 11 : カリキュラムの密度について

- A 全般的に忙しすぎる。
- B つぎの学年が特に忙しすぎる。 [複数解答可]
 - B1 1回生
 - B2 2回生
 - B3 3回生
- E ちょうど手頃である。
- F つぎの学年で特に余裕がある。 [複数解答可]
 - D1 1回生
 - D2 2回生
 - D3 3回生
- G 全般的に余裕がある。
- X その他



1. 設計演習次第だと思う。
2. 時間割の組み方にもよるのだろうけれども。
3. 設計課題を取るか取らないかで差が大きい。
4. サークル等やってなければちょうどよい。
5. 個人的にちょうどよいが、もっともっと勉強をしなくてはならないと思う。

質問 12 : 全学共通科目も含めたカリキュラム全般について意見があれば書いて下さい。

1. A 群がつまらない。先生のやる気が感じられない講義が多い。
2. 1 回生の間の配分をもっと増やしてほしい。だらけるくせがついてから忙しくなるとつらい。
3. 3 回生で教室移動がほとんどなく、一つの教室ばかりで授業が行われていて、退屈だし、前の授業から次の授業への気分転換がしにくいように思う。移動しないでいいのは楽だが。逆に 2 回生の時は建築系の教室と全学共通の教室が遠いので移動に手間取った。ここを何とかして欲しい。
4. 例えば、どういう意図でこのような配当になっているかということを説明してもらえると参考になる。
5. 内容のかぶる科目（クラス指定で習ったことを、専門でまたやる等）がいくらかあり、時間の無駄だと感じた。

6. 設計演習のせいで、授業どころではない。
7. 専門科目を二重登録するとき、両方の授業に出たいのに片方にしか出られないことがある。時間割に少し工夫が欲しい。
8. 3 回生で専門つめすぎ。設計 3 をとった時点で、ふつうの授業に出たくても出られなくなってしまう。作品に納得いくよう力を入れようとおもったら。
9. 専門と一般教養の中間くらいのやつをもっと増やしてほしい。残念。
10. 学部を越えた履修登録などももっとおこなってほしい。
11. 単位制がそもそも馬鹿馬鹿しい。専門と教養の区別も必要ない。
12. 卒業に必要な単位数が多すぎる。まず、1 回生の初めにどの科目がこれからの授業に関係あるかなどを簡単に説明し、あとは各自でまかせればよい。

(最後に、アンケート全般についての質問です。)

[自由記述欄] このアンケート自体について、意見があれば書いて下さい。

1. 何回も同じアンケート形式だとあきてくるので工夫した方がいいと思う。
2. 学生をなるべく中心にした教育の現場をつくるためには、こういう制度をもっとつくるべきだと思う。
3. 真剣に取り組んでいる人が少ないと思う。
4. 設問と時期がいまいち合っていない。
5. 本当にいかされるなら、とてもよいですね。
6. 非常にいい。本当にかわってほしい。

[自由記述欄] その他、何か意見があれば

1. 製図室のクーラーをはやく直して
2. 私は、理学部へ転学しようと思ったが、試験や面接を経て、結局落とされた。出願から半年も待たされてこれである。だいたい、高校生のときに決めた道ですべてというのはちょっと柔軟性に欠けるのではないか？入学前に学部学科を決めるのではなく、入ってからいろいろな講義をとりつつ、自分の進みたい道へ行かせるべきである。しかしそうはいつでも体系的にとらねばならない分野もあるだろうから、そういうことを1回生の初めの時期に教える。あとは各自にまかせる。それから卒業単位も少なくして、自分の好きな勉強をどんどんさせるべきだ。卒業の出口で、チェックすればいい。

2.4.2 設計演習 I アンケート結果

学 年：【2】

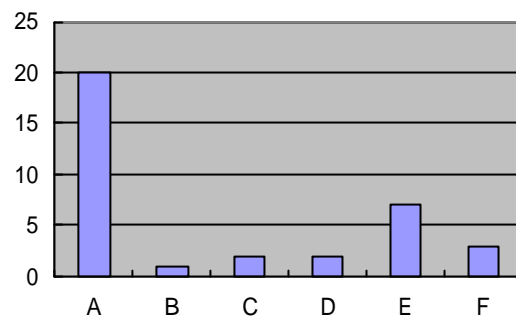
科 目：【設計演習 I】

担当教官：【高橋（康）、布野、山岸、西澤、木下（非）】

回答者数：【38】

質問 12：あなたは将来、どのような仕事を希望していますか。

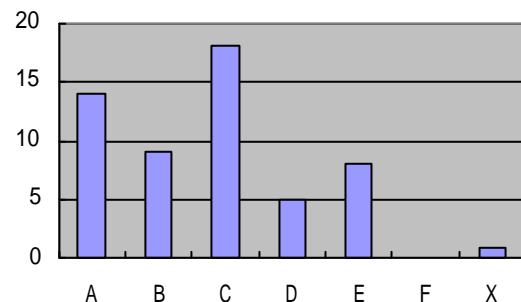
- A 建築または都市設計
- B 構造設計
- C 環境技術
- D 施工管理
- E まだわからない
- F その他（もし決まっているのであれば、以下に書いて下さい）



- 1. 建築関連の出版社での編集
- 2. 公務員

質問 13：この設計演習では下記の項目のどれを最も身に付けたいと思っていましたか。特に二つを選んで下さい。

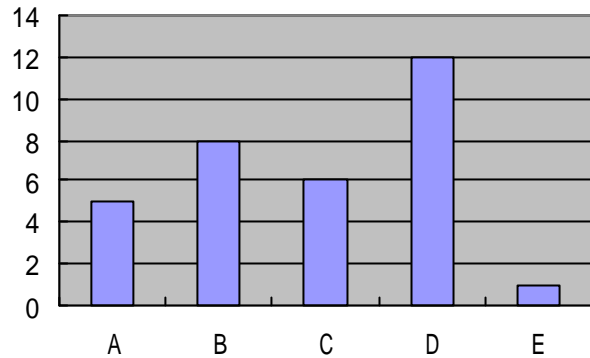
- A 美しい形を創造する能力
- B 構造や環境問題を踏まえた空間の構成手法
- C 人間行動にとって望ましい空間の構成手法
- D CAD その他による製図法とプレゼンテーションの方法
- E 個人や集団の機能を最大限満足する最適空間の構成能力
- F 階段やトイレなど基本的な空間の構成手法
- X その他



- 1. 模型の作り方

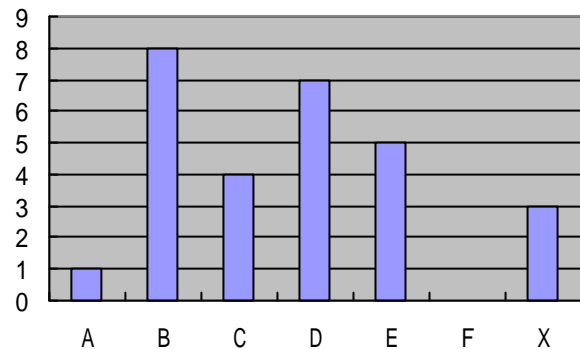
質問 14：この設計演習は、満足いくものでしたか。

- A 非常に満足した。
- B まあまあ満足した。
- C どちらでもない。
- D 少し不満が残った。
- E 非常に不満が残った。



質問 15：この設計演習に満足した理由は何ですか。 [複数解答可]

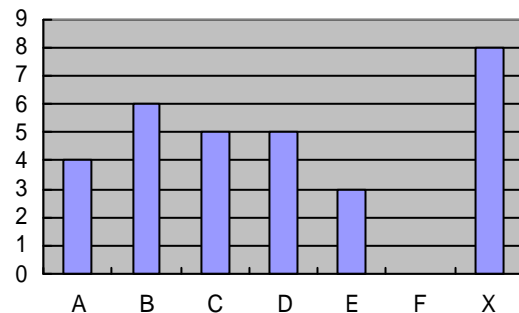
- A 自分の作品が高い評価を得た。
- B 自分の目指すものを習得できた。
- C 草案批評が充実したものだった。
- D 講評会が充実したものだった。
- E 課題がよかった。
- F 他の系列に比べて課題がよかった。
(設計演習 III のみ)
- X その他



1.実測できたのが良かった。体で町家の空間を経験できたので
 2.作品を作ったことに対する自己満足
 3.苦労したかいがあった

質問 16：この設計演習に不満が残った理由は何ですか。 [複数解答可]

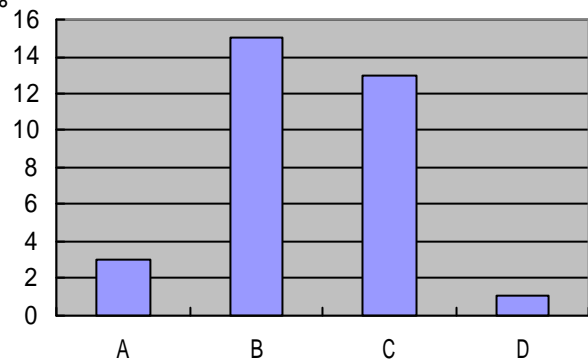
- A 自分の作品が、予想していたよりも低い評価だった。
- B 頑張ったが得るものがなかった。
- C 草案批評がよくなかった。
- D 講評会がよくなかった。
- E 課題がよくなかった。
- F 他の系列に比べて課題がよくなかった。
(設計演習 III のみ)
- X その他



- 1.長時間かけた作品の批評があっけないことが多い
- 2.スケジュールに無駄があった
- 3.詳しい資料や参考資料を教えて欲しい
- 4.時間が足りず、やりながら気づいていった部分を活かせなかった
- 5.予定がころころと変わったこと
- 6.時間的に実質の製作期間が短かった
- 7.評価が不明なのが不満、何が良くて何が悪いのかが分からない
- 8.時間が足りなくて、完成させることができなかった
- 9.やったあとのむなしさ。つかれた
- 10.時間が少なかった。予定変更が多かった
- 11.評価時間が作業時間に比して短い
- 12.他の都合と重なって時間が足りなかった
- 13.資料、未完成で提出

質問 17：何回ぐらい草案批評を受けましたか。

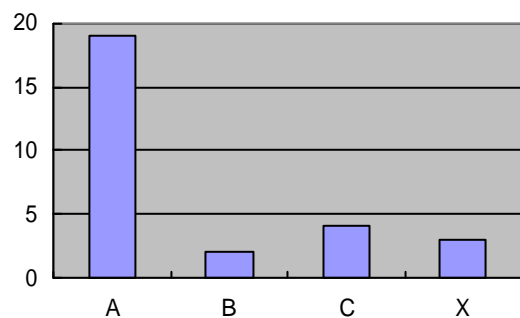
- A なし。
- B 1～2回。
- C 3～4回。
- D それ以上。 _____回



D. 1名、回数未回答

質問 18：草案批評など、担当教官の指導は有効なものでしたか。

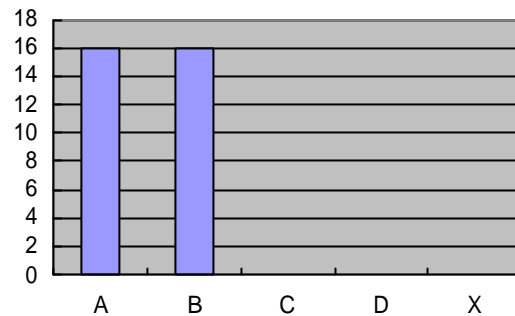
- A 有効であった。
- B 意欲を失った。
- C 自分の目指すものと異なり、役に立たなかった。
- X その他



- 1.何をしても批評されそうで、やりにくかった
- 2.特になにもなかった
- 3.担当教官による。有効であったときでも意欲を失うことがあった

質問 19：設計演習に時間をとられて、他の授業を休んだことがありますか。

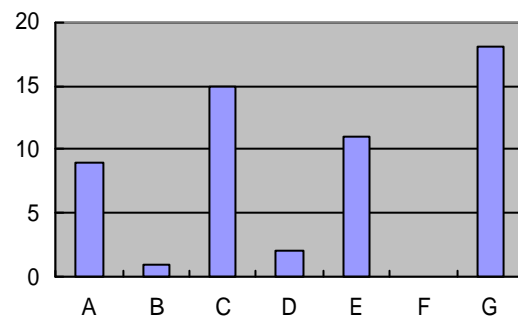
- A 設計演習に集中したため他の授業にはほとんど出なかった。
- B 提出（締め切り）の前には出なかった。
- C 忙しくても好きな授業科目には最後まで出席した。
- D 設計演習に集中したが、必要な科目にはほとんど出席した。
- X その他



1. きつすぎです
2. 一限目にでられなかった

質問 20：この設計演習のための製図道具や製図室、その他の備品や施設の利用について
[複数解答可]

- A 大学には図面を描いたり、模型を作ったりする十分な広さがない。
- B 机や椅子が不足していたため製図室では制作できなかった。
- C 図面も模型も大学で制作した。
- D 模型は大学で制作し、図面は自宅で描いた。
- E 模型も図面も自宅で制作した。
- F 面を CAD で描いた。
- G 図面は手書きであった



質問 21：備品や施設に対する要求があれば、書いて下さい。

1. ロッカーが欲しい
2. 椅子が古くて硬いので腰がものすごく痛い。製図版が大きくなったので、今の椅子ではほとんどの女の子は立たないと線を引くことが出来ない
3. ロッカーが少なく、小さい
4. CAD が欲しい
5. 新しい机は去年の机よりも大きくなって使いやすかった
6. 製図室の空気が悪いので空気清浄機を入れて欲しい
7. ドラフターが欲しい
8. 模型専用の部屋が欲しい
9. 仮眠室が欲しい

10. 蛍光灯をまめに替えて欲しい
11. 机と椅子が足りない
12. ゴミ箱が足りない
13. 製図板の他に道具などをおける机があると嬉しい
14. 一人一席にしてくれないと使えない
15. ロッカーが小さい
16. ドラフターが欲しい
17. 照明をもっと明るくして欲しい
18. 1, 2回生製図室の机を4回生がいくつか使っている上に音楽を大音量で流しうるさかった
19. 仮眠室が欲しい
20. もっとひろいのがいい
21. 自動販売機、シャワー、仮眠室、空気清浄機

[自由記述欄]この設計演習について、あるいはその他の設計演習について、または設計演習全般に対する意見があれば自由に書いて下さい。

1. 最後の木曜を過ぎてから予定を変えるのはやめて欲しい
2. 草案批評の案が固まってからの製作時間が足りなかった
3. 草案批評から提出までの時間が短い
4. 満足できるものができなかった
5. 要求されているものがよく分からなかった
6. 「当たり前に分かっているだろう」とTAや教官が思っている部分分からない
7. 理念とそれを活かす技術をもっと教えてほしい
8. CADを必修にすべきではないか
9. CADを教えてほしい
10. もっと教官による授業などをしてほしい。そうすることで設計演習の意味や演習の効果がより上がるのでは。
11. ドローイングの仕方、模型の作り方など教えて欲しい
12. 課題の意図がよく分からないものがある。どのような作品が優秀なのか分からない
13. 意匠的なものを一つのスケールで切らないで欲しい。人の好みはそれぞれ
14. 締切が早い上にやることが多くてなかなか他の授業にでられなかった
15. 十分な資料が欲しい
16. 教官によって考えが違いすぎる。ある教官にいいといわれた草案が他の教官に否定されてかなり困った
17. 半期に3回も提出があるのは多すぎるように思います。提出直前には他の授業にでにくくなるし、今日は他の授業でレポートが何個かでて大変だった。
18. きつい
19. 早く設計演習が終わって欲しい

2.4.3 鉄筋コンクリート構造 I

学 年：【3】

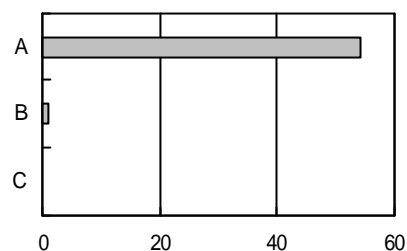
科 目：【鉄筋コンクリート構造 I】(平成 12 年度後期に実施)

担当教官：【渡邊・藤井・西山】

回答者数：【57】

質問 0：この科目を履修しましたか？

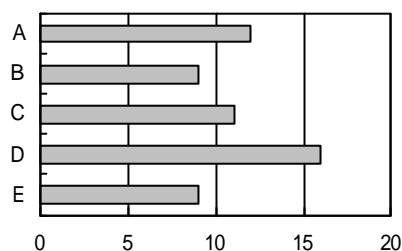
- A 履修して試験も受けた。(以下、全部の質問に答えて下さい。)
- B 講義に出た(ことがある)が、試験は受けなかった。(以下、第 I 部の質問 1~11 および第 II 部の質問に答えて下さい。)
- C 講義にも出席したことがないし、試験も受けなかった。(以下、第 I 部は省略して第 II 部の質問に答えて下さい。)



(出欠および授業について)

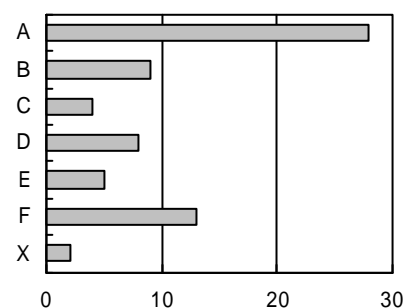
質問 1：この講義にどれくらい出席しましたか？

- A 90 % 以上
- B 70 ~ 90 % 程度
- C 40 ~ 70 % 程度
- D 10 ~ 40 % 程度
- E 10 % 以下



質問 2：出席しようと思った主な理由は？ [複数解答可]

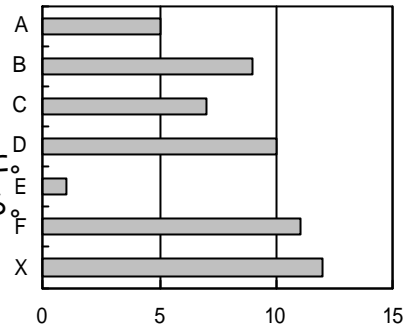
- A 重要な科目だと考えたから。
- B 内容に興味をもてたから。
- C 授業が面白かったから。
- D わかり易かったから。
- E レポートが出る(または出席をとる)から
- F なんとなく。
- X その他



1. 毎日プリントがあった

質問3：欠席した主な理由は？ [複数解答可]

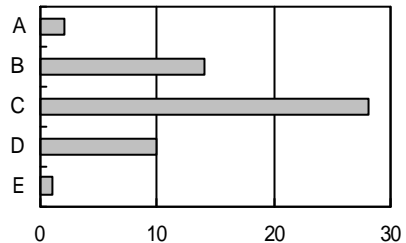
- A あまり重要でない科目と思ったから。
- B 内容に興味をもてなかったから。
- C 授業が面白くなかったから。
- D わかり難かった、または授業についてけなかった。
- E レポートが出ない（または出席をとらない）から。
- F なんとなく。
- X その他



1. 都合の悪い日もあった
 2. 個人的な理由により（バイト、睡眠など）
 3. 忙しいため
 4. 設計演習の課題をしたかったから
 5. バイトその他のプライベートの都合上授業時間と生活のリズムの不一致
 6. 眠かった（2）
 7. 他にやることがあったから仕方なく
 8. 他の授業に出ねばならなかった
 9. 起きられなかった（2）
 10. 試験の時間を間違えた
 11. 設備演習で忙しい時期は出られなかった
 12. 寝坊
 13. 設計演習で忙しい
- （ ）内は回答数

質問4：授業は全般的に面白かったですか、退屈でしたか？

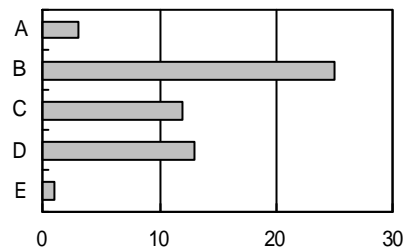
- A 面白かった。
- B まあまあ面白かった。
- C どちらでもない。
- D 退屈であった。
- E 聞く気もしなかった。



1. 覚えていない

質問5：授業は全般的にわかり易かったですか？

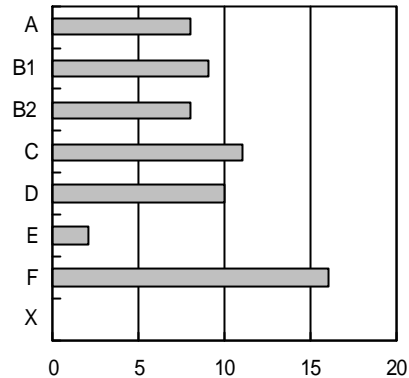
- A 非常に分かり易かった。
- B まあまあ分かり易かった。
- C どちらでもない。
- D わかり難かった。
- E 非常にわかり難かった。



1. 僕が勉強不足だけです
2. 説明されたことは一応理解はできた

質問 6：授業をわかり易くした、または面白くした要因は何でしたか？ [複数解答可]

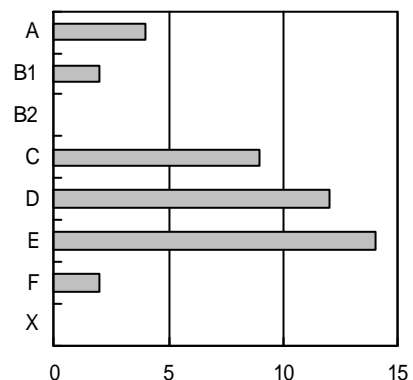
- A 図・グラフ・模型などの視覚的に理解しやすい工夫があったから。
- B 話し方、板書など
 B1 話し方が明確で声もよく聞こえた。
 B2 板書がよみ易かった。
- C スピードが適切で説明も丁寧であった。
- D 学生が持っている知識の範囲に十分配慮して説明してくれた。
- E レポート課題、計算機演習などが与えられて、それを解くことで理解できた。
- F 教科書・プリントがよかった。
- X その他



1. 板書の内容が丁寧で分かりやすかった
2. わかりにくい

質問 7：授業をわかり難く、または面白くなくした要因は何でしたか？ [複数解答可]

- A 視覚的に理解しやすい工夫がなく、ただ講義だけであったから。
- B 話し方、板書など
 B1 話し方が不明瞭・声が聞き取り難い。
 B2 板書がよみ難い。
- C スピードが速く、説明も雑であった。
- D 学生が知らないことを前提としてどんどん話題が進められていった。
- E 練習問題などが与えられなかった（または今どれをやったら良いのか指示してもらえなかった）。
- F 教科書・プリントがよくなかった（まったくなかった）。
- X その他

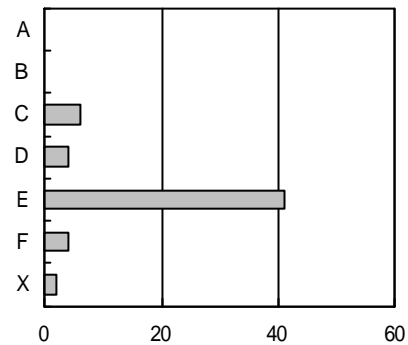


1. 分かり易いと思われているが、私には分かり難い。(構造力学の教科書)
2. スピードが早かった
3. 理論と実際との往復が欲しい。理論一辺倒では現実世界からはなれていくような心地がする
4. 科目自体が難しかったから
5. 話しがつまらない、ノートを書きすぎる、時間オーバーすぎる
6. 先生が説明するだけでどこをやっているのか分からなくなる。一度分からなくなるともうついていけなくなってしまった
7. 初めから抵抗があった
8. 僕が知らないだけです
9. 自分に聞く気がないとわかりにくい。聞く気があれが面白いのだとおもう
10. 難しい面白くないとは思はなかったが E に関しては不満であった

(予習復習および教官の姿勢について)

質問 8 : 復習をしましたか(していますか)?

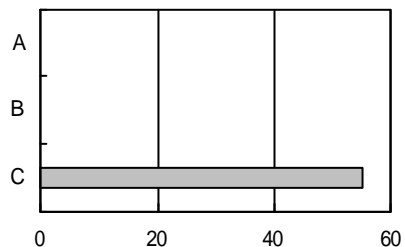
- A 毎回、進んだ部分には目を通して、練習問題もやってみている。
- B ほとんど毎回、講義ノート・教科書を見直す程度のことにはしている。
- C レポート課題、計算機演習課題などが出題されたときに必要最小限度で復習している。
- D 期間中、1~2度見直したことがある。
- E 試験前にまとめて勉強した。
- F まったく復習せずに試験だけ受けた。
- X その他



1. 少しだけ
2. 少しだけした
3. 少し板書が速いところがあった

質問 9 : 予習しましたか?

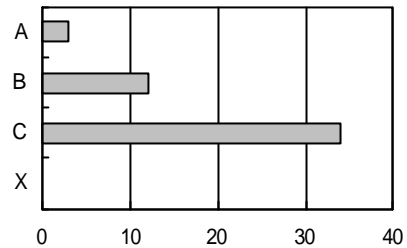
- A 毎回、次のところを見てから授業を受ける。
- B 予習をしたことがある。
- C 予習したことはない。



1. 仕方がわからない

質問 10：授業中、授業後に質問するチャンスについて

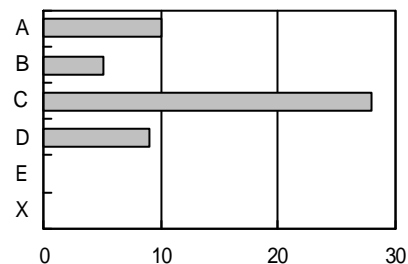
- A 授業中または授業後に自由に質問できるし、したこともある。
- B 授業中または授業後に質問したいと思うことがあるが、教室の雰囲気や先生がつかまらない、といったことで質問し難い。
- C 質問したいと思ったことはない。
- X その他



1. あまりにも分からないので知らないことが多すぎて質問するに質問できない
2. 質問する程理解できていない気がしたので、できなかった
3. 質問する程理解できていない気がしたので、できなかった
4. まず友人に聞いて分かなければしようと思うが、今のところないので質問したことがない
5. 友人に聞いている
6. 授業後なら質問できた

質問 11：教官の姿勢についてどう感じましたか？

- A 非常に熱心に授業しており、受講者にも熱意が伝わって（出席すると）勉強する気にさせられる。
- B 非常に熱心に授業をしているが、少々独走的なところがあり受講者とうまくかみ合っていない。
- C 普通である。
- D 一応の授業は行っているが、熱意が感じられない。
- E まったくいい加減である。
- X その他

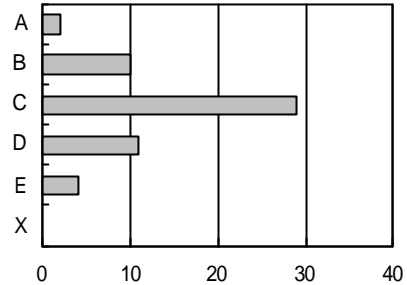


1. 比較的
2. しょうがないとは思いますが。
3. わからない
4. 熱心にやってもらっているが、わからなくなるとついていけないのでやる気にならない
5. 試験前になった時にでも先生の教室に行って教えて欲しいと思うことがよくある

(試験および及落について)

質問 12 : 試験の難易度について

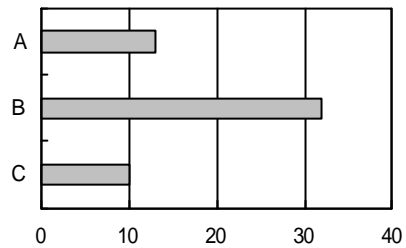
- A 予想より易しかった。もう少し骨のある問題を出して欲しい。
- B 予想より易しかったが、この程度がよい。
- C 予想程度の難しさであった。
- D 予想より難しかったが、この程度は仕方がない。
- E 予想より難しい。もう少し手がつけられるような問題を出して欲しい。
- X その他



1. あまり勉強していない人でも単位が取れた
2. 時間を間違えかけた

質問 13 : 試験の出来具合と実際の成績との関係について

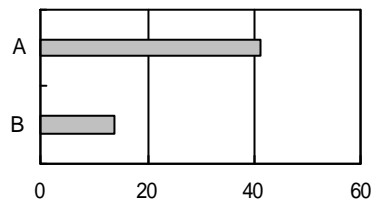
- A 自分が思っていたより成績が悪い。
- B 自分が思っていた通りの成績であった。
- C 自分が思っていたより成績が良い。



1. ある程度理解していたつもりだったが、計算があわなくなっておかしくなった。落ちた

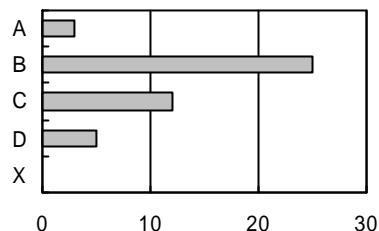
質問 14 : この科目に合格しましたか？

- A 合格した。
- B 不合格であった。



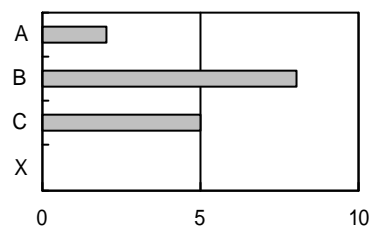
質問 15 (質問 14 で A と答えた人): この授業を受けて得られたものがありましたか?

- A 授業内容を十分理解できて、この分野の知識・考え方・問題の解法・基本的な手段等が身についた。
- B 授業内容を十分に理解したとは言えないが、将来、この分野の課題に直面したときには、復習をしながらそれなりの対応ができるだろうと思う。
- C 何らかのものが残っているとは思いますが、将来それを生かせる自信はない。
- D 単位はもらったが内容はまったく残っていない。
- X その他



質問 16 (質問 14 で B と答えた人): 不合格であったが

- A 授業内容はわかって試験もまあまあ正答したつもりである。不合格であったことが納得できない。
- B 授業中または試験前はよく理解したつもりであったが、試験を受けてみて理解していないことがわかった。
- C 授業内容がまったくわからなかったので、不合格なのも納得できる。
- X その他



1. ある程度達成しているので来年がんばる
2. 自信を持って合格できた、とはいえないがある程度達していたと思う。来年頑張る

自由記述欄

1. 実際あまり覚えていません。わずかな記憶から回答させて頂きました。ただ比較的分かりやすいし丁寧な授業であったことはおぼえております。
2. 高校時代、物理が苦手でした。苦手を克服するために自分でやったことは自分で問題集を買ったり、先生からもったり何度も繰り返してやりました。また放課後には毎日のように職員室に行って質問しました。(長い時は2時間くらい)。理解するためには、自分の努力は必要なので、不合格だったのは努力不足だとわかっています。プリントやノートを見ても何が言いたいのかが、さっぱり分かりません。予備校のような、分かり易さまでは、必要ないですか。もうちょっと簡単に説明して欲しい。(高校生に分かるくらい)のと、質問しやすい環境が欲しいです。(TAでもいいので)

3. 板書がきれいでわかりやすかった先生もいた。教室の空気が悪いのですぐ眠りたくなってしまうのですが、ノートをとっていると目が覚めます
4. きちんとしたプリント資料が配布されているので、今後勉強を再度行う際、そうした物を利用することでスムーズにできる。
5. 内容に興味のもてる授業を望む
6. 基本的に講義は理解しにくい説明だったりしてプリントをもらいにいくという感じであった。授業を聞くというよりも自分で本やプリント等で勉強した方がわかりやすいというのがあった。
7. 鉄工の講義は構造系の中では内容もわかりやすく進み方もちょうどよかったとおもう、ただ授業自体はやはり退屈なものでありあまり講義に出ようとは思わなかった
8. 自由に出席して最後の試験でちゃんと合格できればよい。毎回出てレポートや課題をやって力をつけていく。という 2 つの考え方があると思うが自分は試験前にまとめて追い込まれてやるタイプなので、普段から課題が多いのはしんどいと思う。試験は成績だけでなく、答案を返し解答を出して頂けるといいとおもう。
9. 建築学科は他学科に比べて実験が少なく講義が多い気がします。設計演習をやったら空いている時間で作品を仕上げなければならず、全ての科目をしっかりと勉強するのはかなりむづかしいとおもいます。
10. 授業はどの科目に対しても言えることだが、教師がどうというより受ける者がどうかというのが問題である。聞く気がある時はいつもおもしろく聞くことが出来身になっている
11. プリントの形で資料を配布してもらうのは教科書を買わなくてすむので有り難いが内容理解のため練習問題をくばるか、レポートを課してほしい
12. どうしてまた、RC 構造についてのアンケートだったんでしょうか
13. もう少し理解し易い教科書問題集があればいいと思う
14. 先生によっては講義やプリントが分かりやすかった。

2.5 シンポジウム参加者の意見

建築学専攻、教授

企画としてよく練られたものとなっていたと思います。最後のコメントの先生方の意見も貴重でした。これをカリキュラムを含めて教育の改善にどう活かすのかということについてはこれからだと思います。

土木工学専攻、助教授

設計教育は、コメントータ両氏のコメントにもあったように、他の講義の意味を理解するうえで、有用であると思われます。ただ逆にいうと、その科目が過剰な負担になっているならば望ましくありません。

教員や卒業先の会社・社会がそう易々と専門分野を変更できないので、カリキュラムをどう組替えても、教育内容を変更することはできないと思われます。逆に言うと、学外人材の登用が必要と思われます。

合成・生物化学専攻、助教授

建築学科教育シンポジウムに参加させていただき、大変勉強になりました。日頃から、学部や大学院の授業を行っているなかで、どのようにしていったらよいかを、自分だけで考えるだけでなく、幅広い意見に耳を傾けることで、いろいろと考えさせられました。

設計演習については、門外漢ですが、学部教育というよりは、研究に近いという印象を受けました。基礎的な部分に限定して、後は研究室に配属されてから行うというのが、我々化学系の感覚であるように思います。しかしながら、余り、一般的な知識を詰め込むのも、押し売りのようになって逆効果でもあり、また、京大で行う教育としては望ましくないようにも思います。

土木システム工学専攻、助教授

ロールプレイングの特に学生の役割をされた先生方が、役に徹したなかなかの名優で、興味深く議論を拝聴させていただきました。本物の学生がすぐ近くにいるにもかかわらず、どうしてわざわざ教官が学生の役をするのかずっと疑問であったのですが、教官が学生の立場に立ってみることで、授業やカリキュラムに対して違った見方ができるようになるための刺激になるという感想を持ちました。

さて、学生役の先生方の名演技に刺激されて、自分が学生のときを思い出しながら議論を伺っていて、「大学院を含めた6年一貫教育」という考え方に、強く感じたことが2点ありました。

- (1) 一貫教育という言葉は途中に入れ替えのないシステムを連想させるので、結構厳しいMCの入学試験がある状態では、この言葉はそぐわないと感じました。教官にとっては一貫教育をしているつもりになれても、途中で学生が変わるのであれば、学生にとっては一貫教育ではないと思います。
- (2) 学部を受験する段階では、この学科で4年間勉強するところといったプロになれるという紹介に基づいて、学科を選択するわけですが、入学してしばらくすると、「ほとんどの人は大学院を目指すんだ。科学技術は進歩しているので、マスターぐらい行かないと仕事ができるようにならない。」という説明を受けることになります。これは、悪い言い方をすれば、ある商品をこれで機能が完結すると思って購入したとたん、「実はそれだけでできることはあまりありませんよ。これを別に購入しないと前の物が無駄になり損ですよ。」という類の説明をされることと同じで、正当なサービスを提供しているのとは言いえないのではないかと気がなりました。

以上は、もし、自分が学生としてこの議論を聞いていたらどう思うかという立場で感じた点ですが、自分も学生に対する説明をする場合には、注意しないとイケないと感じた次第です。

電気工学専攻、教授

本日のFDシンポジウムに関する感想を以下に記させていただきます。表面的な意見しか述べられませんがお許し下さい。

- (1) 建築学科の特殊性を浮き彫りにすることができた良い試みであった。特に、各学年の学生の中に見られる典型的なパターンを示すことでそれに対する教官側の温度差を浮き彫りにされたことが興味深かった。
- (2) 建築学科全体の中で、設計演習の重要性は各人認めた上での意見の対比と考えられた。仮に、この演習を全く無しにしたとしたら、果たして建築学のカリキュラムが成立するのかという疑問が残った。それは建築でも何でもなく、単に、構造力学分野が残るだけではないかと思われた。従って、議論の背景にはそれを否定する前提が存在したと思われる。
- (3) 学生が入学時に設計を主体とする専門職に就きたいと思っている割合が多いにも関わらず、それを断念せざるを得ないとき、彼らが構造系、計画系で過ごすことに意義を見いだせることができるかという点が、他の専攻に比較して難しい点と考えられる。
- (4) 創造性教育に関するノウハウを、他の専攻に対してアピールされることは重要と考えられる。
- (5) 荒木評議員から指摘のあった、出来の悪い学生に関しては当然本日の議論とかみ合わない点がある。今後、これらの学生への手厚い教育無しに大学教育は成立しない。その時、果たして現状の設計演習に重きをおくカリキュラムが維持できるかどうか重要な点があると考えられる。

工学研究科化学工学専攻、教授

- (1) シンポジウムの形式等について

ロールプレイによる討論は、非常にすばらしいものでした。特に、学生役の先生方の的確な議論の提起が、今回のシンポジウムを有益なものにしたと感じました。

- (2) 設計教育について

設計教育の重要性は、他学科所属の小生も同感です。化学工学科（現工業化学科プロセス工学コース）でも、教室創設以来、60年間毎年、4回生に必修で化学プロセスの設計をさせます。これは、研究室単位で、若いスタッフの先生方が全員指導にあたり、2ヶ月近くかけて、徹夜しながらまとめ、発表、レポート（80ページ程度）を提出する科目です。これを実施することによって、2～3回生の各科目で習得した点の知識が始めて線、立体になってリンクし、4回生の化学工学に対する理解度が、大きく変化します。また、現実のプロセスを扱うので、授業では教えきれていないノウハウ的な要素も経験できます。小生自身、企業のプロセス開発に5年間携わっておりまし

たが、プロセス設計で習得した自分なりの論理が非常に役に立ちました。卒論も同様ですが、創生型教育というのは、できるだけマン・ツー・マンに近い状態で、実際に教官、学生が同じ課題に向かって、実施していく作業がポイントで、建築学科では、その一つが設計教育であると理解するとともに、万難を排しても重要な科目と位置付けるべきと感じました。

(3) カリキュラムについて

6年一貫教育が、議論の焦点の一つでしたが、6-3-3-4の学制、初等、中等教育内容との関連性からも考察する必要があると思います。世の中は、複雑、迅速になり、活動ツールも高度になってきております。これが若者に精神的な負担を与え、ゆとり教育が実行されようとしています。今回、この点は言及致しませんが、事実として、大学に入学する学生の知識量は、一昔前のそれよりは減少してくるでしょう。一方、大学で教える内容は、これまでのような学問体系だけでは、社会の要請に対応できず、複合領域、先端領域の教育も必要となってきております。このように、大学の入口、出口のレベル差がどんどん離れていっており、この現実に対応した高等教育の体制とすることが不可避です。すなわち、6年教育にシフトさせないと社会の要請にマッチした人材を輩出できない現実が迫っていると考えます。個別のカリキュラム論に入る前に、大学全体としての高等教育システムの改変を検討すべきと感じました。

(4) どんな人材を育てるか

シンポジウムでは、建築学科は、他の科学と異なり、職能という部分があるので、少し毛色が違うという発言がありましたが、小生の個人的な見解では、同じだと思います。工学は、その昔、Manufacturingの中での経験的な事実、それを利用した技術を論理的、普遍的に体系化しようとしたものと思います。20世紀は、物質文明、資本主義イデオロギーに基づく工学が社会の要請でしたが、21世紀は、感性（人間を再度、問いかける）環境などの新たなイデオロギーに基づく工学が社会に大きな要請の一つになってくると考えております。この観点から、建築学科で教育されている、正解がいくつもある設計教育こそが、それに対応する教育ではないかと感じました。また、21世紀には多かれ少なかれ、エネルギー・資源・環境他で抑圧された状態が訪れるでしょう。どのような空間（地球～部屋まで）を創造するかが、共生の時代である21世紀の人の営み、精神的安定のベースになると思います。建築学こそ、そういう時代の文化を誘引し、21世紀のあるべき人間活動、人間性を誘導できる学問領域ではないでしょうか？京大の卒業生が、そのような領域でのトップランナーであって欲しいと思っています。

以上、雑駁なことを述べました。誤解している点もあるかも知れませんが、ご容赦下さい。

土木工学専攻、助教授

非常に興味深く拝聴させていただきました。

地球工学科では、土木コース・環境コース・資源コースの学生が1回生時点では、同じ学科の学生として入学してくるため、平均的な学生にとっては、自分がどのような目標に向かって、どのような知識や知恵を修得すれば良いのかという点が、ますます見えにくくなっている様な感じがいたします。シンポジウムの最後にコメンテータの先生からお話がありました様に、入学時に学生に対して勉学に励む上での動機付けとなる様な情報を教官側からも発信してやるのが重要ではないかと強く感じた次第です。具体的には、この学科ではどのような研究ができるのか、また卒業後はどのような分野で活躍することが可能か、またそのためにはどのようなカリキュラムをとる必要があるのか、といった点を学生が理解できる様、積極的に教官側もサポートすることが必要ではないかと思えます。

建築学専攻、助手

金曜日はシンポジウムお疲れ様でした。今回のシンポジウムを企画・参加された先生方の熱意を感じました。特に、設計演習の存在に関しては私も大変気にかかっておりましたので、興味深く拝見しました。

教育問題に関して、学生側の意見を反映させてシンポジウムを構成した点でこれまでよりも一歩前進したと思えました。しかし、こうした教官側の努力を、学生及び社会がどう評価するかを彼らに聞いてみてはどうでしょうか。恐らくどうやって用いられるかを十分理解せずに回答したアンケートに基づく今回のロールプレーは、京大建築における教育のあり方に関するたたき台を作り出したに過ぎない気がします。こうしたたたき台をさらに良くしなければ今回の試みは教官側の自己満足に終わってしまうでしょう。例えば、学生側のオブザーバー数人（異なる学年、異なる国籍）を今回のシンポジウムに出席させて後から意見を聞いてはどうかと強く感じました。また、学校が送り出す学生を使うこととなる建設業界・研究機関からのオブザーバーの必要性も感じました。

いずれにしても、今回のシンポジウムに関する教官の努力を、第三者の評価にさらすべきだったとおもいます。（外部から2名ほどは来ておられましたが。）教育のあり方を最終的に決定するのは教官であるべきですが、現在の姿を映し出すモニターを常に見ながら次のステップを柔軟に決めるべきだと思います。そうした意味では、学生や会社等の意見は大変貴重で良いモニターになるのではないのでしょうか。良いフィードバック信号を用いれば、改良も早くスムーズに進むことと思えます。

京大建築学科の教育に関して：私の見識では、例えば当研究室における学部生や修士の学生は、4年間または2年間に身につけることができるであろう構造知識・スキルの1/2程度しか身に付けずに卒業している気がします。これは、私の身近な研究室でも同様に感じられることです。京大の名前だけは背負っているものの4年間（または2年間）の成果を伴わない卒業生を送り出すことは学生にとっては悲劇であるし、この責任は我々教官にあると感じます。

「京大建築を出たのだから少々問題は解決することができるスキルと自信」を与える教育が行われているか大変疑問に思われます。構造系に所属する私個人としては、スペシャリストを作り上げるには学部生には時間が足りていない（例えば設計演習などに時間を割かれすぎている）と感じます。また、学部・修士課程を通じて講義は行うが学生の理解を試す宿題や試験はほとんど利用しないといった教官の姿勢は、国外の大学教官と大きく異なる点です。いずれにしても、与えられた時間内にどういった人間を創り出していくのかを明確にし、これに対する努力を行っていく必要を感じます。

材料化学専攻、助教授

初めて「FD」を体験し、非常に興味深く討論を聞かせていただきました。建築学会の問題点がよく浮き彫りになっていたと思います。特に生徒役の先生方がうまく演じておられたことに感心いたしました。このFDを如何に今後の教育に活かしていくのか？といった展望を示していただければ、なお良かったと思います。

環境工学専攻、助手

初めての参加でしたが、議論を聞いていて、大変参考になりました。

私の経験から言えば、旧衛生工学科でも施設設計演習があって、苦労したことを思い出しました。そのときの設計図（全紙3枚）を現在も大事に保管しています。もちろん、他の科目も記憶にあります。この施設設計演習は4年間の在学中で最も印象に残っている科目です。小生もこの科目のお陰で、技術者としてやっていける自信を深めました。

「設計演習」のような科目で、自分で考えて、行動することが、工学教育には必要と考えます。問題は、それを保証する時間の確保だと思います。現在の学生は何か忙しそうですから。アンケートの回答になっているかどうか分かりませんが、私の議論をお聞きしての印象です。

物質エネルギー化学科、助手

私は上記の様に化学専攻なので、建築学科とは学問的背景も、それに関連して大学および大学院レベルで必要な教育が大きく異なります。シンポジウムを拝聴して、実学である建築学の教育の難しさがよく分かりました。また、学生の卒業後の進路の多様さを考慮すると、建築学について最低限必要な知識とは何かと言った基本的な事項に関しても、多様な議論があることも理解できました。以上のように、建築学科の教官の先生方の熱心さと建築学の教育の困難さは理解できましたが、素人で若輩者ではありますが、下記の事項が参考意見となれば幸いです。

(1) 早期研究室への配属

1から3回生までの間に、基礎学力および基礎的な実習をふくめた教育が行われていることは理解できますが、学生の進路が多様なことを考慮すると早期に（1から3回

生の間に) 専門的な研究が行われている研究室に配属(仮配属で十分だと思いますが) できれば、具体的な研究がより身近になり、学生も方からしても自分の進路を決定するのに大いに参考に成るのではないのでしょうか?(類似意見は、コメンテータの鈴木先生が述べておられました)

(2) 基礎学力の充実

実学である建築学の基礎学力といっても非常に広い範囲になると思いますが、大学低学年では基礎学力の充実にもっと力をいれた方が良いと思います。大学院までの六年間での一環教育と言われることは、結果的に実習中心になってしまう現在の大学低学年のカリキュラムとは矛盾するように聞こえました。(もちろん、大学において実習が重要な位置を占めることは理解できます)

建築学専攻、助手

(滋賀大学の鈴木先生がおっしゃられていたことを受けて、ですが)

設計演習を「構造学」や「環境学」など、また、計画や設計に入る前の歴史的な環境の読みとりといった広い意味での「計画学」などに向けた興味の啓発などの契機にする場合には、設計演習の課題がもつ総合性の意味を解釈し直し、それをプログラムの中に反映させていかなければならないのではないかと考えました。(現在、この演習は諸分野総合の演習と言うよりは意匠設計もしくは施設計画学のための演習に近い、狭い範囲だけをカバーしていると考えます)

また、他専攻、他研究科の先生方の発言ももっと聞いてみたかったと思います。

物質エネルギー化学専攻、助手

討論で感じた感想を述べさせていただきます。多他専攻のため詳細なカリキュラムはわからない部分が多いので、見当違いな意見になるかもしれませんがご了承ください。

設計は、建築学科において基礎的な技術を習得する講義・演習であるため、単位や授業時間は増やすことには賛成しますが、減らすことによって学生のレベルは下げることにつながりかねないことはすべきでないと思いました。さらに、全体のカリキュラムの必修や必要単位数は、パネリストが言われたように京都大学としてのレベルを保つためには減らすべきでないと思います。

また、設計3では、90名内19名しか最後まで受講していないと言うことは、ここで、すでに自然と優秀な学生のみを対象とした講義が行われているようです。全体のレベルを上げることも、このような優秀な学生を伸ばすことも優先すべきことであり、カリキュラムを変える必要はないと考えます。

6年制一貫教育については、将来建築関係以外の仕事をしようという学生は、4回生で卒業する道を残すべきであるのみ賛成です。あるいは、山形大学工学部のように一般教養課程(現在2回生まで教育)で転部あるいは退学を勧告制度もあっても良いと思います。その方が、マスターコースや専門課程に、やる気のある学生が集まると思います。

最後に京都大学卒業生としてのレベルの維持については、パネリストらの結論どおり、教育方針として優秀な人材を育てることを目的とすべきで、安易に今後の学生のレベルに講義をあわせるために卒業生のレベルを落とすようなカリキュラムの変更はすべきではないと思いました。

生活空間学専攻、教授

多少感想を列挙しておきます。

- ・このような議論を学科内でたまにはやるとよい。
- ・建築の特殊性（現場ごとの一品生産）が議論されてもよかったのでは。さらに、「ものづくり」といっても、実際に作っているのはデザイナーでもゼネコンでもなく、多くの業種の職人たちであること。このことを基本にして、
- ・社会に売れる学生をいかにトレーニングするかという視点も、就職担当としてはほしかった（需要の少ないデザイン（アーキテクト？）部門だけが強調されすぎていた）。

資源工学専攻、助教授

地球系教官のひとりとして参加させていただき、地球工学科シンポジウムと対応させながら聴講しました。建築学科の特色がよく分かる内容のシンポジウムで、地球系の場合も大変有意義思いましたが、今回も大変有意義で今後大きく参考になると思いました。

工業化学科、教授

今回は建築学科という工学部の中でも特色のある学科のFDであったこともあり、ある意味ではこれまでで最も興味深いFDであったように思います。具体的には、他学科にとってやや特殊な「設計演習」という科目が取り上げられていたこと、そもそも建築家あるいは建築技術者、言い替えれば芸術家あるいは特殊職能者を目指す学生の声をそれなりに反映したものであり、工学部他学科（特にこちらの工業化学科）の学生とはかなり異なったイメージを持っていることが分かりました。

次に、今回のFD（通算4回目）では、先生方の経験も豊富になっておられ、非常に良い運営であったと思います。これまでのFDはやや消化試合のような感じもありましたが、今回は参加された教官全員、特に若い教官も熱心に聞いておられたようで、だんだんFDが定着してきた感を強くしました。

物理工学科、助手

ご苦労さまでした。

どの学科においても似たような悩みがあることがわかりました。

アンケート全体に対してですが、私自身大学での授業のあり方は押しつけるものではないと考えております。しかし、現在の学生気質は、楽しんでライセンスさえ得ればトク、と

いった感じでありとまどっています。確かに一部の者は、能力なり知識を鍛えにきているようですが、多くの者は与えてもらいにきている感があります。

実態を知らないので批評していいのか迷いますが、冒頭に高橋先生が全体像を示されたように建物を造る学問であり、それを取り巻く環境や文化、自然がその時代時代で絡んでくる総合学問であることは確かだと思います。その観点からすると、いろいろ賛否のある設計演習は是非必要と思いました。ただ、世間で言われる芸術的な評価は問題があるようにも感じました。アンケートの回答に講評が平等でないような意見がありましたが、かなりの時間を割くほどの負担が科せられているようでもあり反省すべき点があるように感じました。

カリキュラム全体において、授業科目名から内容の読めない科目もますます多くなってきており、履修届後内容を見て選択するのは仕方ないかなと思います。できれば、ガイダンスにおいて科目の概要説明があれば、届けと受講者の数が近くなるかも知れません。

長々と書きましたが、必ずしも時間がきついとは考えられません。どの授業も自由参加でいいと思います。履修届も不要、出席点も不要、要は当人がどれだけ勉強したかであり括り付けてもだめでしょう。

その代わり評価は厳正にし、当人にはっきり公示できるよう教官側が態度で示す必要があるのではないのでしょうか。

土木システム工学専攻、助手

学生役のパネラーの先生方が、あくまで学生の立場で発言されていたため、議論がわかりやすく、非常に効果的だったと思います。

- ・シンポジウムの始めに、建築学科のカリキュラム体系、設計演習の位置付けに関する説明があったため、その後の議論が理解しやすく感じました。
- ・設計演習という授業があるのを初めて知りました。学生の皆さんにとっては非常に大変のようですが、このように、実際に手を動かして作品を作る体験は重要だと思います(これはシンポジウムに対する感想ではありませんが)。
- ・シンポジウムのテーマの一つとして、「どんな人材を育てるのか」という項目が挙がっていましたが、地球工学科では、学生の理系離れが進んでいるように思います(とくに土木コース)。土木工学を学んでも、就職先としては土木を選ばない学生が増えています。そのような意識の学生に対して卒論の指導などを行なっても、少しむなしい感じもしています。教官の側が、「どんな人材を育てるのか」真剣に議論してみても、当の学生の側が「どんな人間になりたいのか」考えていなければ、肩透かしに終わる可能性もあります。学生に、大学で学ぶとの目的を常に意識させるような教育指導を心がける必要があると強く感じました。

土木システム工学専攻、教授

アンケートの設問があったのかどうか分かりませんので、感想を述べさせていただきます。

- (1) 建築学科の学生の役をされた先生方の見事な対応に感心しました。
- (2) 6年一貫教育の必要性を強調されていましたが、一方で、大学院入試では、入れ替えもある厳しいものと言われていたので、矛盾を感じました。6年一貫教育を推進するためには、学部学生がそのまま大学院に進学するシステムの実現が必要であると思われませんが。

情報学科計算機科学コース、講師

見落としているのかもしれないのですが、どのようなアンケートを行なっているかが、分かりませんでした。以下、とりあえず、参加して持つにいたった意見を書いておきます。もし、アンケートとして意図したものでない場合は、ご連絡いただけたら幸いです。

建築学科における設計演習は、創造性、実践的な力を養う重要な役割を持つ一方で、系統的で応用できる知識を学ぶのに必要な講義の時間を圧迫しているという問題もあるということでした。しかし、結局のところ、実践的な力も系統的知識のどちらも大切で、力の入れ方の配分は学生任せでよいし、またそうにしかならないのではないかと感じました。

また、ここまで設計演習と講義が別の側面を担っているのであれば、カリキュラムを考える際も、問題となるのは時間的配置くらいではないかと感じました。

なお、コメンテータの方の意見発表はさすがに分かりやすく感じました。

プログラム上、もう少し早ければ、さらに理解の助けになったのではないかという気もいたしました。

滋賀大学（コメンテータ）

先日はシンポジウムに参加させて頂きありがとうございました。勉強になりました。当日のコメントとも重複しますが、アンケートを送信します。

他機関に所属する者として、シンポジウムについて

- ・ 建築学科の高等教育に関し、広い意味での共通の目的をもった集団として、教官集団がうまく機能していると感じました。そのような集団が育ってきた背景こそが、FDという意味では後発の他機関、他学部にとって大事な情報になると感じました。
- ・ ロールプレイングという形式を取り入れることによって、教官それぞれの素直な考えが出てきやすかったと感じました。
- ・ 互いに葛藤を起こす発言もあったと思いますが、それを修復できるような人的関係が、教官集団の中に既にできていることがすごいと思いました。

教育研究する者として、設計演習&カリキュラムについて、先生方のやりとりを通して見えてきたものを以下にあげます。

(1) 設計演習の授業

- ・ 学生たちに本物の学びを段階づけて提供しようとしている practices oriented な授業

(2) カリキュラム

- ・ 多様な専門家集団との出会いの場が提供されている
- ・ practices と knowledge をどのように関連していくかという姿勢でデザインされている
- ・ practices の中に「自分にはこの知識がかけている」、「あの授業のこの知識をこのように使えばこの課題を break through できる」という状況を埋め込むことはできないか practices の授業と系統的に知識を学ぶ授業の循環が今以上にうまくいくのではないか

(3) どのような学生を育てるか 専門性とは何かという問いへのつながり

- ・ 大学院までの一貫教育を含めた新しいカリキュラムをつくっていくとき「多様な本物と学生との出会いをどれほど保障するか」ということも大事なようですね。

参考

高等教育におけるポートフォリオについて書いた文書（発表要旨）があります。「ポートフォリオ」という道具は、建築学科における practices と knowledge をいかに関連していくかというテーマとなじむかもしれないと考え、原稿のコピーを高橋先生宛に郵送します。2000年度日本科学教育学会（7月）で発表したものです。同じ物のコピーは荒木先生にもお渡ししてあります。（これに、パークリーの高等教育の事例の別刷も同封します。参考になればいいのですが。）2001年度日本教育工学会（11月）では、滋賀大で私自身が展開しているティーチングポートフォリオの具体的な実践例を紹介予定です。

機械、教授

- (1) 建築の場合、我々の分野（機械系）と違って、学習するにあたってかなり人間の個性、というか感性が大きく関わってくる分野であること、それによって教育方法がずいぶん変わってくる（変わるべき）なあという印象をもちました。もちろんそうでない分野もあるわけですが（学生A）。
- (2) 設計演習に力をいれておられるのがよく分かりました。学生の反応はさまざまなようですが。機械系でも設計演習をやっておりますが、貴学科でやっておられるほど「創成科目」にはなっていません。貴学科の場合は、(1)との関連でそのようになる（そう

ならなければ意味があまりない)のかなと思います。ただ、学生の成果を指導者側が正当に評価しているのかどうか、あるいは評価できるのかどうか、といった点が、アンケートも含めた学生の反応からは多少疑問が感じられました。この点が教官側の考えるべき点かもしれませんが、実際には難しいだろうというのが印象です。

コメンテーターが言われたように、私も early exposure (早くから現場へ) というのはうまくいくと非常によいと思います。機械系でも、設計演習とは異なりますが、インターンシップ等を入れていこうとしています。それとコメンテーターが言われた「上回生が下級生を指導する」というのも面白いと感じました。指導する方はいろんなことを学び得ると思います。

- (3) 設計演習は職能教育の側面をもっていますが、常に問題となるのは、(京大は)そのような教育をすべきか、あるいは底上げをすべきか、またはエリート(社会をリードしていく)を育てる(上位 5-10%程度の)ことに専念すべきかと言う点があります。どうも私は最近の学生には「エリート」云々は、すれ違いではないかと言う気がしています。それは、入学してくる学生の質が低下している、エリートどころではない、という感じがすることが多いからだというのも一つの理由で、もう一つは、学生はエリート意識は一人前に持っているけれども、だから将来、日本を(あるいは産業界を、あるいはまた世界を)リードしていかなければ、と言う「感覚」はもっていない(他人事?)のではないかと感じるからです。

いずれにせよ、貴学科では設計演習はすべて必修ではなく、選択科目にもなっていますので、やはり学生の好み(向き不向き)で(職能科目であろうとなかろうと)で選択して、その中で非常に優れた人が出てくれば、それはそれでよいのだと思います。

とにかく、知識を詰め込むだけでなく、「自分で考える」訓練は職能教育、エリート教育、あるいは底上げ教育にかかわらず、必要なことでそのような場を提供できる環境を作ることが必要だと思います。以上、思いつくままに書きました。

工学研究科物質エネルギー化学専攻、助教授

去る 11/2 (金) 工学部大会議室で行われた教育シンポジウムについての感想を述べさせていただきます。

- (1) 「設計教育」は、他専攻にない実質的な創造性溢れる実習教育であり、極めて魅力的である。但し、学生側教官から指摘のあった「教官により評価が異なる」ということについて、どのような対策で取り組んでおられるのか、明確な回答が得られなかったのが残念である。
- (2) 教育の目的が「エリートを育てる」ということになっていたが、これには異論あり。京都大学を卒業したからといってエリートの資格を得るものでもなく、元来エリートとは何か。これは教官側の「自分達はエリートである」という自意識過剰(大きな勘

違い) から起こっている現象。またエリート教育では、判で押しした様な優等生のみが育成され、個人の個性は消失する(官僚的発想)。例え一般教養や、専門科目の一部の成績が悪くても、「これだけは他の追随を許さない秀でたもの」を持っている学生はその才能を伸ばしてやるべき。

- (3) 学生の質の低下は工業化学科でも顕著である。修士課程も含めて6年一貫教育には賛成であり、これをやらなければ社会に通用しない。
- (4) 全般的に学生役が優秀すぎた。もっと劣等生がこのようなディベートには必要。教官役は教官E先生は老練で議論の焦点をぼかす? うまいディベート。他の2人の教官役は経験不足のためかほとんどディベートになっていなかった(学生役に圧倒されていた)。

以上、勝手なことを思い付くままに記載させて頂いたことをお詫び申し上げます。よろしくお願ひ申し上げます。